3a
292
昭3

昭和三年御大典記念

鄉土讀本

寄島東尋常小學校

教科書
31-1928
20000

43408
教科書文庫
4
291
31-1928
20000
66167

資料室
中央図書館
教科書文庫
4
291
31-1928
2000066167
3a
292
昭3

誤表

頁	行	誤	正
二十二	七	平方治太郎引續いて	平方三郎が引續いて
四十三	二	山田長市	八幡長市
四十七	五	幹事	監事
四十九	三	また	まだ
五十	二	等を	等の
五十二	八	終項	終頃
五十五	七	春景	背景
六十	九	寄島槃	寄島
六十一	十一	若會	若槃會
六十四	九	弘法師	弘法大師
七十六	十一	籔	藪
七十七	八	二月二日	二月一日
七十九	四	五月七日	五月廿七日
八十二	十	武枝	武技
八十三	一	池畦	池畔
百	一	功六級	功七級
百	二	東安倉	福井
百一	九	中遂	中途
百四	十一	討隊伐隊	討伐隊
百四	十二	寶瑞章	瑞寶章
百五	三	住みよい	住みよい場所は

序

眼前に横はつてゐる郷土の大自然は實に皆地理歴史の活教材である。郷土の地理と歴史は車の両輪の如く相關的に有機的に展開されてゐる。

此郷土を知悉するものにして始めて郷土の發展を期劃することが出來るのである。

茲に郷土讀本を編成し、此活用によりて兒童の魂をして愛郷愛國の權化たらしめんとするものである。

昭和三年七月

秋田貞治識す

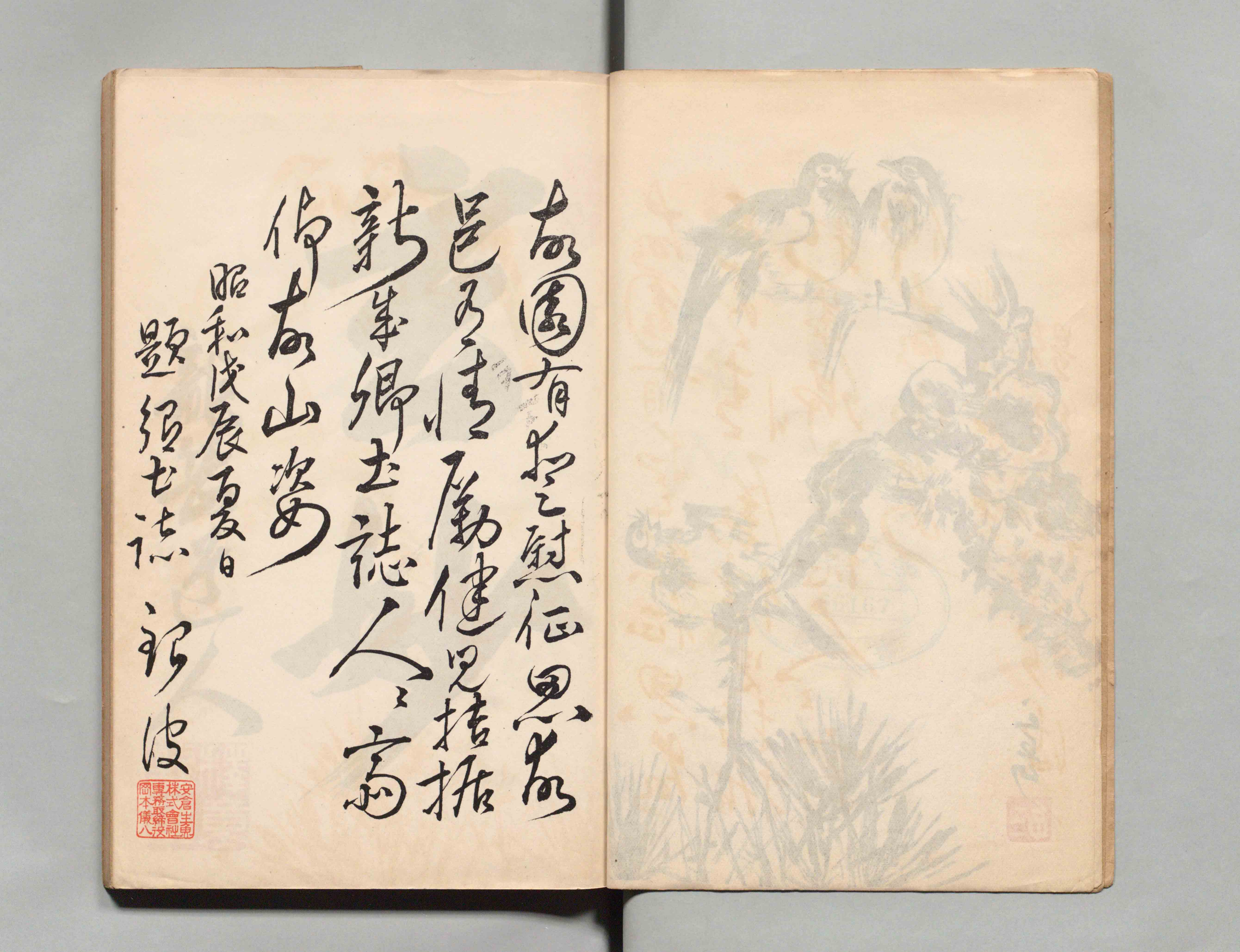
広島大学図書
2000066167

昭和戊辰夜

鄉土讀本

遠海老人

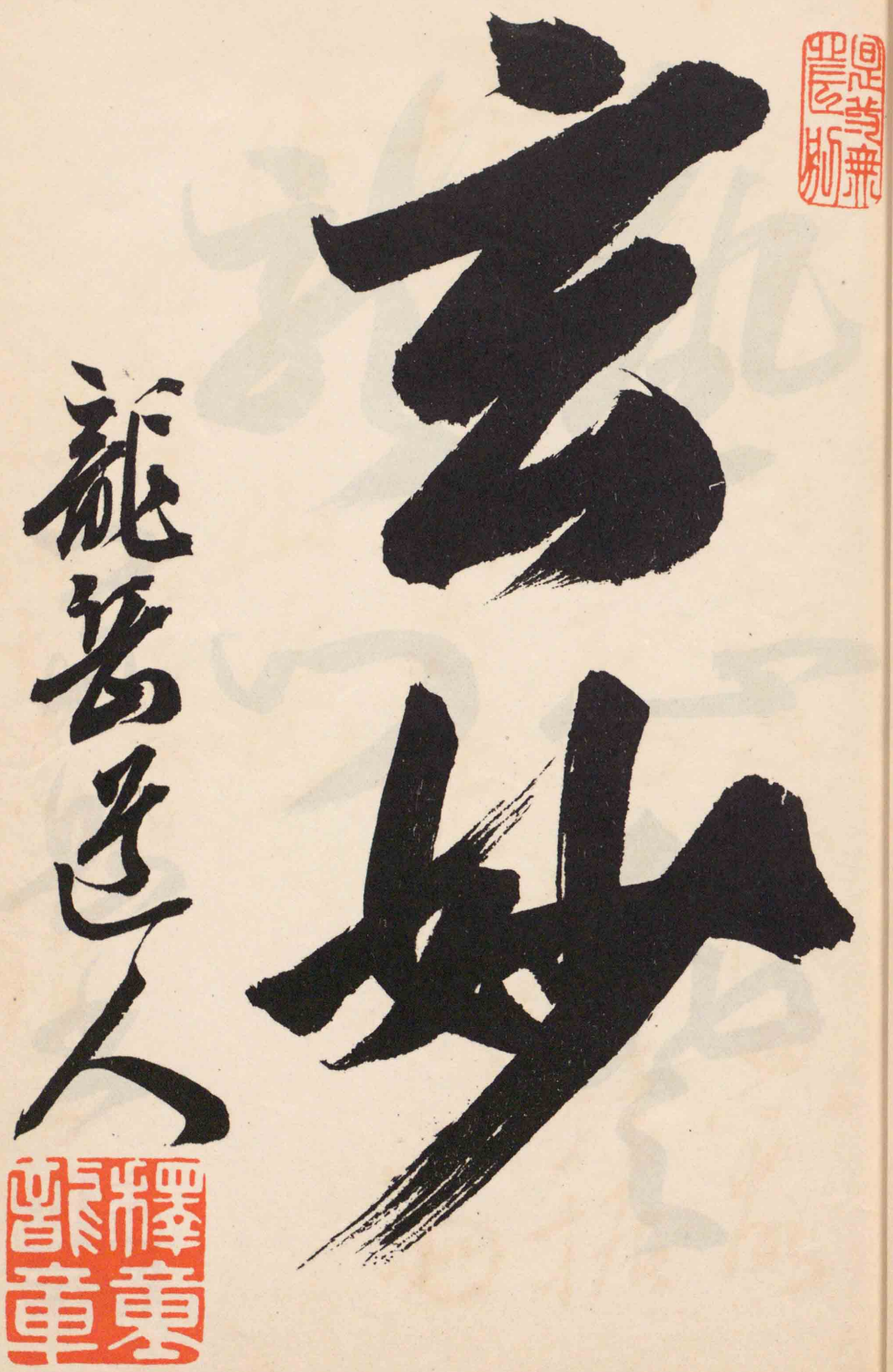
広島大学
教
66167
図書



本圖有松之尉伝思出為
邑子情厚勤健兒拮据
新年得志誌人之高
仰本山寥寥

昭和戊辰夏日
題紹七誌　新渡

安倉生命株式會社
專務取締役
岡本儀八


玄妙
龍若思人

一知半解

高安山人

目次

海上より見たる寄島町圖　一
淺口郡寄島町圖　五
近海漁業圖　九
本校平面圖　十
本校沿革　十
郷土名勝八景（寄島八景）　十一
位置　十二
區劃　十六
氣候　二十八
地勢　二十八
産業　二十八
諸官衙學校
町役場　二十八
學校　三十
郵便局　三十四
警察署　三十五
鹽務局出張所　三十七
銀行會社工場　三十九
第一合同銀行寄島出張所　三十九
頃末洋行寄島分工場　三十九
ヤヨイ製帽株式會社寄島分工場　三十九
主御門製帽所　三十九
岡邊製帽所　三十九
森田製網所　三十九
諸團体　四〇
寄島町青年團（寄島青年團・安倉青年團）　四十
寄島消防組　四十二

漁業組合　四十三
寄島町農會　四十四
衞生組合　四十四
帝國在鄕軍人會寄島町分會　四十五
寄島信用組合　四十七

交通

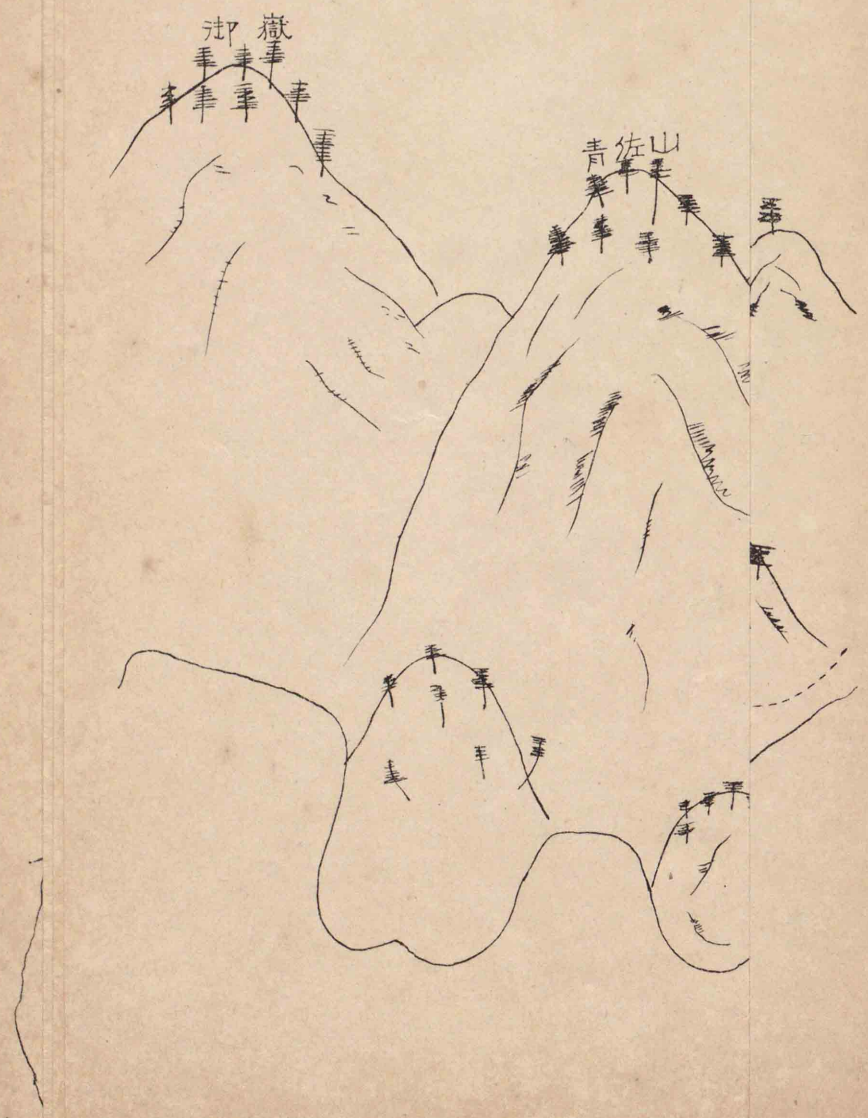
舊蹟　四十八
寄島　五十
青佐山城趾　五十一
龍王山城趾　五十二
青佐山台塲　五十二
棄石　五十三
古墳　五十三
奇石　五十三
燈明岩　五十四
原田惡右衞門の墓　五十四

神社佛閣教會所

安倉八幡宮　五十四
大浦神社　五十五
八幡神社　五十六
金毘羅宮　五十七
嚴島神社　五十七
早崎神社　五十八
尾燒天神社　五十八
稻荷神社　五十八
荒神社　五十九
白髮大明神　五十九
大明神　五十九
登神明神　五十九
惠比須神社　六十
龍城院　六十
圓珠院　六十二
不動尊　六十三
觀音堂　六十三
藥師堂　六十四
塞の神　六十四
弘法大師　六十四
尊城院海樂寺覺禪坊　六十四
地藏尊　六十五
大社教寄島教會所　六十五
金光教寄島教會所　六十五
天理教寄島宣教所　六十五

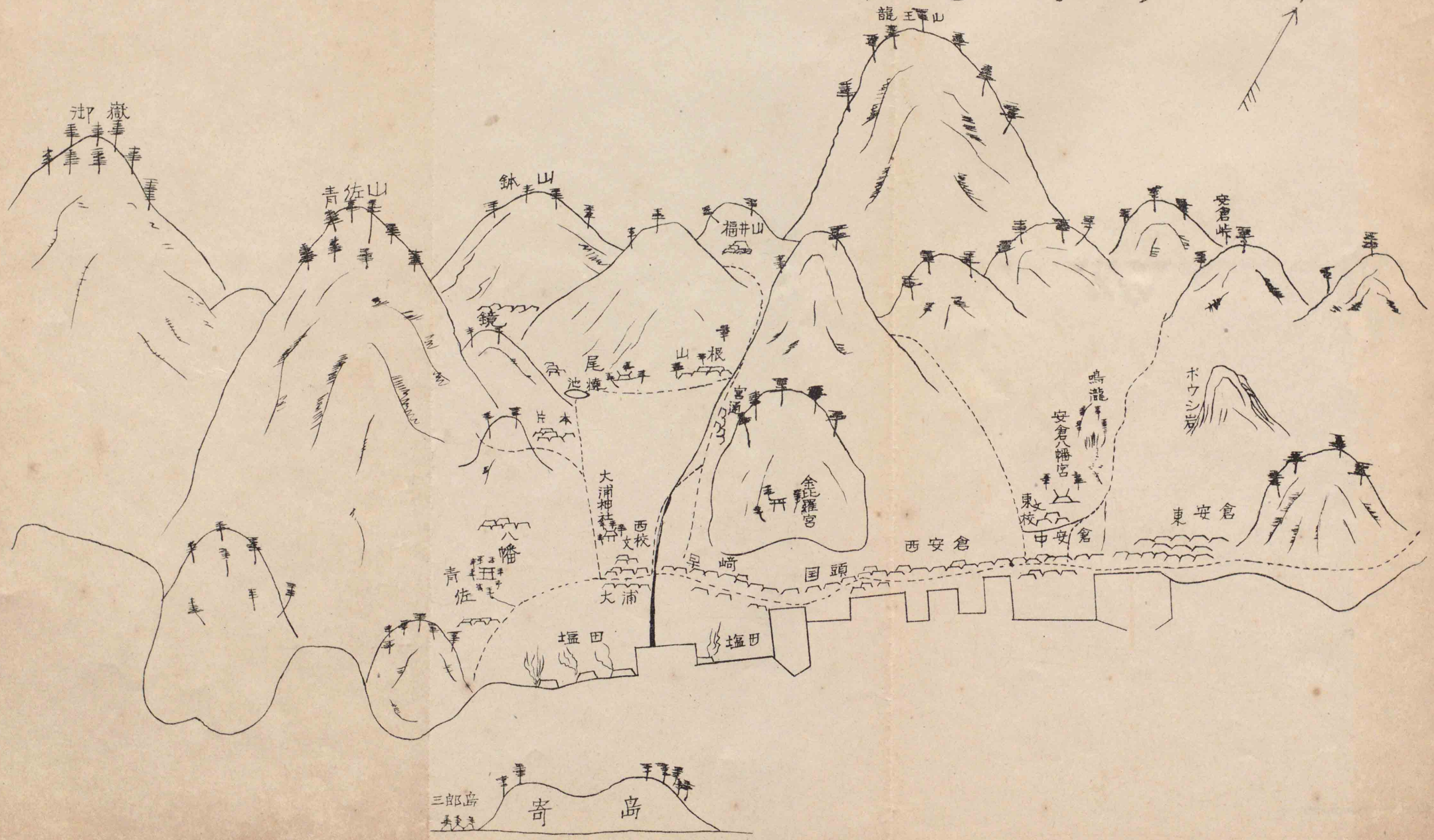
沿革

風俗習慣　六十六
年中行事　七十
人物　七十五
小野幸七　八十二
岩井昭見　八十二
福島玄仙　八十三
仝市郎　八十四
大店　八十五
西屋　八十五
名主源介　八十五
名主直四郎　八十六
原田新造　八十六
齋藤瀧左衞門　八十七
小川屯　八十七
陶山三郎　八十七
貞婦さと　八十八
齋藤樂二　八十八
道廣忠讓　九十
　　九十



岡本仲吉　九十一
村上森造　九十一
村上常太郎　九十三
金鵄勳章拜受者　九十五
戰歿死者　九十六
結び　百五

海上ヨリ見タル寄島町


御嶽
青佐山
鉢山
鏡
尾
池
根山
宮通
片本
大浦神社
西校
大浦
八幡
青佐
塩田
塩田
金毘羅宮
井山
龍王山
安倉峠
鳴瀧
安倉八幡宮
東校
中安倉
西安倉
国頭
東安倉
ボウシ岩
三郎島
寄島

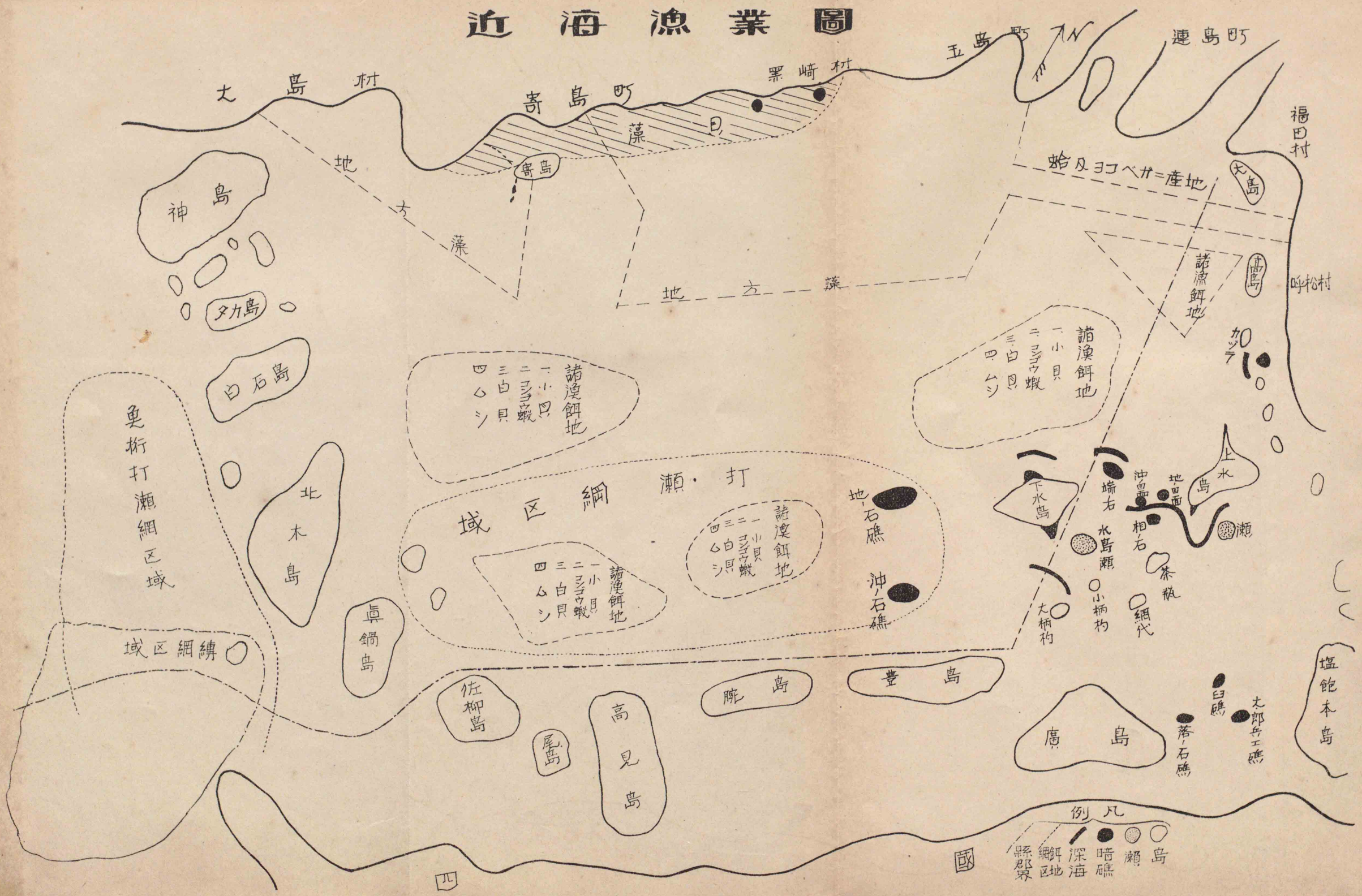
淺口郡寄島町圖

龍王山
2896
東安倉
中安倉
西安倉
N
1/25000
宮
通
山根
尾
焼
国頭
崎
早
鉢山
242
本
宮
前
鏡
佐
青
清佐山
2496
寄
島
三郎

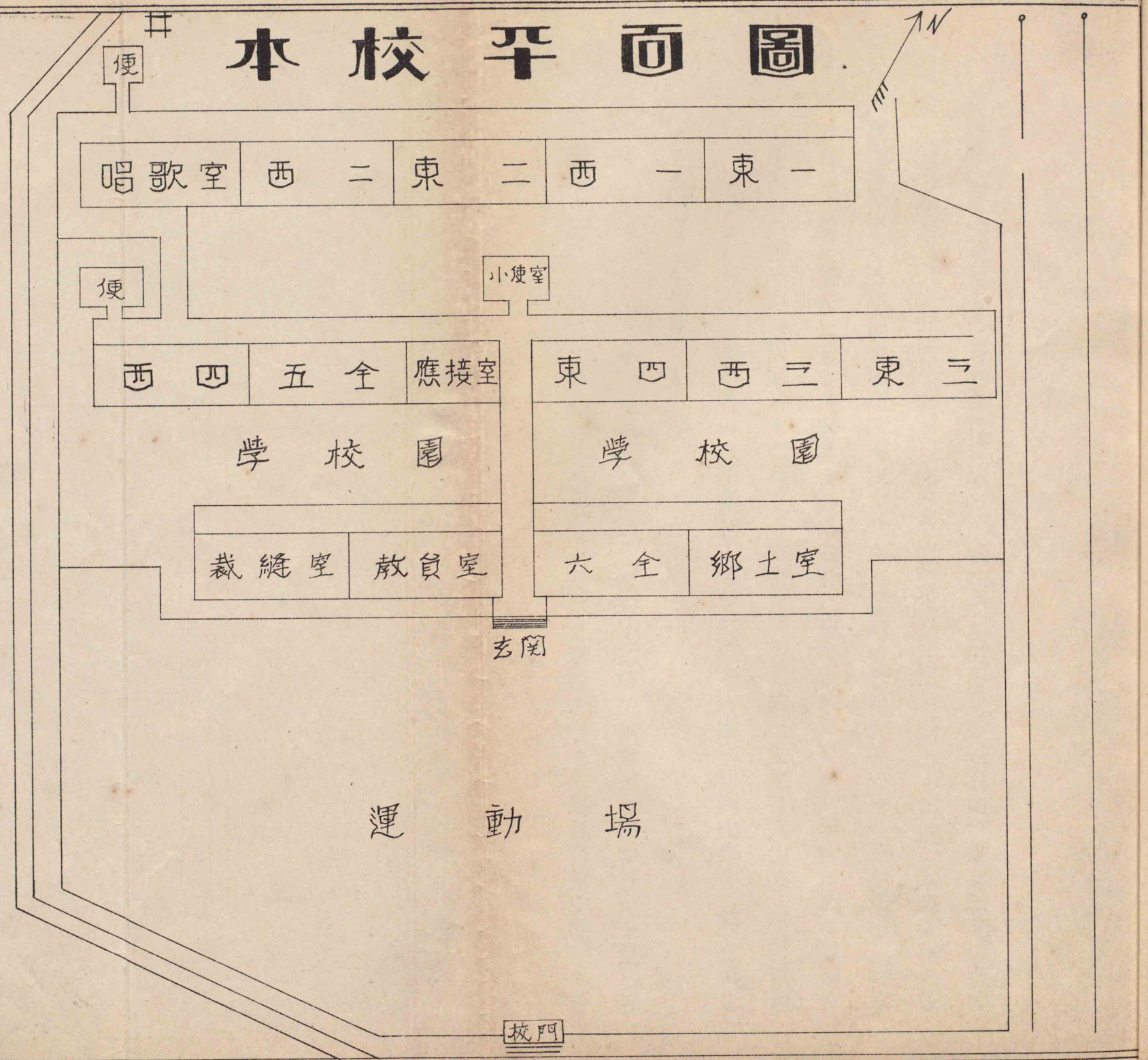
第三図

I 印、青田

近海漁業圖


大島村
寄島町
黒崎村
玉島町
連島町
福田村
呼松村
神島
多島
白石島
北木島
真鍋島
佐柳島
尾島
高見島
鼻島
豊島
廣島
塩飽本島
上水島
下水島
瀬
寄島
大島
高島
加ツラ
地方藻
藻
海藻
蛤及ヨコベガニ産地
諸漁餌地
一小貝
二ヨコウ蝦
三白貝
四ムシ
打瀬網区域
網縛区域
奥桁打瀬網区域
端右
沖面
地面
相石
茶瓶
網代
水島瀬
小柄杓
大柄杓
地石礁
沖石礁
白礁
太郎兵エ礁
落石礁
例凡
島
瀬
暗礁
深海
餌地
網区
縣界

本校平面圖


N
便
唱歌室
西二
東二
西一
東一
便
小使室
西四
五全
應接室
東四
西三
東三
學校園
學校園
裁縫室
教員室
六全
郷土室
玄関
運動場
校門

鄉土讀本

本校沿革

江戸時代は寺小屋で教育を受けて居た。維新前本町では東安倉の道廣忠讓宅の海樂寺、道廣多晉八、岩井照見の母、中安倉の鈴木直四郎、大浦の小川屯、大島柴木の笠原直造等の宅が寺小屋教育所であつた。その當時は各自好みの所へ行つて學んだものである。明治維新になつて啓蒙舍が東安倉に建てられてゐたが場所が狹くなつたので中安倉の市場の一民家にも收容して敎へた。この時の先生は岡山藩士で池田信濃守の侍講をしてゐた漢學者の八屋素一であつた。その次には岡山藩士大村雅吾で洋學を研究してゐた人である。

明治六年三月十日現在のこの地に梁二間半、桁十二間で六敎室と一事務室を建て鳴瀧小學校と稱し。二十三年四月小學校令が變つて廢校となり、寄島尋常小學校の分

教場となつた。所が三十三年一月には、寄島東尋常小學校といふ今の名前になつて、西校と分れた。四十一年一月義務教育が、延びることになり、四月から五六學年を增すことになつた。

そこで、教室が狹くなり、此の年の二月から、第二校舍四教室を建てかけて八月に造り上げた。四十三年四月第二校舍に一教室を建て增した。それでもまだ狹いので、大正元年四月から七月までに、第三校舍四教室が出來上つた。

今では先生十一名兒童四百四十三名が、學びの道にはげんでゐる。毎年三月十日を學校記念日として、講話會又は体育會を催してゐる。

わが東校の校長先生の名前は

鳴瀧小學校	首座	鈴木忠太郎	自明治六年
寄島東尋常小學校	校長	鈴木豊吉	自明治三十三年
〃	〃	田邊靜太	自明治四十一年
〃	〃	東勝平	自大正三年
〃	〃	服部鹿太郎	自大正八年
〃	〃	守屋忠太郎	自大正十一年
〃	〃	秋田貞治	自大正十三年

寄島東尋常小學校職員名（昭和三年七月一日現在）

校長	秋田貞治	本正	黑川嫁
本正	中西末松	本正	西川かねよ
本正	花房逸夫	尋正	淺野高代
本正	江原祀男	專正	松葉サトノ
本正	荒川昌功	校醫	福島春太郎
本正	今井清	以上十二名	
本正	池田績		

本校の校歌

一、龍王山の影すみて
安倉の濱の松原に
水島灘の波寄する
たつは我等の學舍ぞ

二、流れ絶にせぬ鳴瀧に
常磐の樟に色はにて
學びの跡はなりひびき
文讀む聲は明らけく

三、峯より高き君の恩
君と親とを敬ひて
海より深き親の恩
世の人々をいつくしめ

四、嵐を拂ひ波をきり
昔の人の血を享けて
進む漁船の雄々しさは
我等の持てる魂ぞ

五、龍王山は峨々として
勇と愛とを敎として
水島灘は波靜か
學の海を渡れかし

名勝八景

一、春は若葉の古き樟
沖には躍る櫻鯛
神のみ前に生ひ茂る
出漁の舟の勇ましや

二、夏は凉しき三つ山に
峯より落つる鳴瀧に
釣する人の影青し
うたれて淨む身と心

三、秋は月澄む青佐山
底ひの知れぬ釜の口
渚に浮ぶ銀の影
茅渟や小鯛の群遊ぶ

四、冬は色濃き神の老松
福井の寺の鐘の音に
千代萬代と千鶴の啼く
平和の町は明け暮れぬ

八幡の古樟

安倉八幡宮の第二鳥居のほとりに周りが十九尺もある何百年かたつた樟の大木が

ある。春の頃黑ずんだ古い幹から青い若葉が勢よくのびて生々してゐる時は殊に神々しい心持になる。

安倉の出漁

廣い海原を春霞の彼方へ消にて行く數多の帆掛船の眺はまた格別で雄大な繪そつくりである。

三つ山の奇觀

人間業で出來ぬ、一大自然の三星島こそ奇妙である、形こいひ大きさこいひ島と島との隔りこいひ磯馴松の枝振り迄型に入れたかと思はれる樣でまことに風雅な眺めである。干潮の時は島脚が一つになつて滿潮には三つの島となつて浮ぶ。

鳴瀧の飛沫

鳴瀧山の峯から南へ飛び散る鳴瀧は直下十丈巖に激し玉と碎け道行く人をして瀧見橋に足を止めさす。

青佐山の秋月

西海岸に聳にた青佐山にかゝる秋の月は海の面に金波銀波を漂はし詩人でない者迄も心を引かれる。

釜の口の深淵

三郎島の東南岸に釜の口の樣な深淵かある。上から覆ふ松の茂み、波打ちぎはは鬼の面の切り立ち岩、水は青淵底知れず、まことに龍が棲むかと思はれる。

大浦の老松

大浦神社の境内を飾る鬱蒼とした老松は幾百年神に仕へたことであらう。

福井山の晩鐘

福井山の鐘の音が響き渡つて一日中の勞れた躰が慰められる。町民の心を救ふ平和の鐘である。

大正四年文學博士井上圓了が寄島八景の勝れてゐるのを見て一詩を賦せられた

寄島八勝

八勝相連寄島灣
水明山紫是仙關
二千年古神舟跡
在此風光秀美間

（井上圓了）

寄島名勝民謠

一、こゝは南備の海岸で
名勝古蹟の寄島よ
昔神功皇后が
三、春は水島櫻鯛
夏の涼みは鳴瀧で
二、征韓凱旋その歸途に
御船を寄せし古蹟あり
これ寄島のいひなるぞ
四、冬の雪見は福井山
風光明眉の三郎島

秋の月見は青佐山
陸前松島何のその
五、漁ごる舟も眞帆片帆
櫓かいの聲も勇ましく
實に賑はしき魚の棚

位置

寄島町は淺口郡の西南部にある海岸部落である。東は黑崎村につづき、北は龍王山が境となつて六條院村と隣り西は青佐山によつて、大島村と堺し南は一帶に海で前に寄島が峙つてゐる。

本町は東西四粁南北三粁で面積は十一平方粁ある。淺口郡全体の凡そ十五分の一に當る。

地上の度は北緯三十四度三十四五分東經百三十三度三十七八分の所である。

區劃

町内には大字がなく東安倉。中安倉。西安倉。國頭。早崎。宮通。福井。山根。尾燒。片本。鏡。青佐。島の十三部落に別れてゐる。

大昔は宮通福井尾燒鏡等に民家があつただけで今の平地海岸地方は皆海であつた。明治九年寄島村が出來た時には戸數九百で人口が四千百二十九であつたが大正九年の國勢調査の時には戸數一千四百で人口七千二百二十四となつた。

十三部落名と其戸數（昭和三年七月一日調）

部落名	戸數	部落名	戸數
東安倉	二八七	山根	一五
中安倉	一九三	尾燒	八〇
西安倉	一六〇	片本	七〇
國頭	二四〇	鏡	五六
早崎	一六〇	青佐	九六
宮通	四〇	島	二二
福井	二〇		

現在戸數合計　一、四一六戸

仝　人口合計　八、二〇二人

氣候

北境は一帶に山で南は海である。その南の海からやはらかい海風が吹いて來て冬は暖かく夏は涼しい。冬六條院村から霜雪を踏んで來た人が福井を越すと何の跡方もなく着物が一枚丈け暖いと云ふ程である。

地勢

本町の中央北境に龍王山が屹立してゐて、其の脈が西に走つて鉢山や青佐山を起し、青佐鼻岬となり、東に鳴瀧山を越しそれが海岸に出て標示が鼻となり、中部海岸に一脈を出して早崎となつてゐる。この早崎附近一帶の地に市街が出來てゐる。これから東が安倉で西が舊東大島の地である。

本町の地質は大部分は舊火成岩に屬する花崗岩である、然し青佐山の大部と鉢山、向山の山嶺は水成岩(古生代)中の砂岩粘板岩から出來てゐる。又早崎には花崗岩に隣つて新火成岩である石英粗面岩が噴出してゐる。

龍王山は六條院村に跨つた高い山で直立二百九十米ある、維新前までは大きな木が生ゐ茂つてゐたが濫伐のため殆んど禿山となつた。

その後保安林に編入され、近年又砂防工事が行はれた。

青佐山は本町の西南端に聳ゐ大島村と境をしてゐる、樹木が茂つてゐる所には兎、雉等が棲んでゐる、高さは二百四十二米である、鉢山は青佐山の北方にある山でその麓の尾燒山(向山)は樹木が茂つて初夏には杜鵑の聲を聞き秋は茸狩の樂がある。

鳴瀧山は龍王山の東にあつて山麓に有名な不動の瀧がある。

宮通川は源を龍王山から發して早崎を通り海に入つてゐる長さは一、二粁で平生は流水がない。

寄島は陸地と離れることが約一粁の前面に横つてゐる小島である、周圍は三粁ある、東方は松の木が茂つて釜の口と云ふ深淵に臨んで魚附林となつてゐる、北海岸には民家が二十ばかり集つてゐる、南岸は海水浴の好適地であるがその設備がまだ出來てゐない。

港灣と干潟

寄島港は早崎港と云ふ。明治維新の時鴨方藩主が領内に一の港がないので不便であると云ふので明治元年藩主は奉行水田市右衛門下役渡邊太惣治にいひつけてこの地

を埋め立て築港して道路をこしらへたから次第に繁昌し笠岡玉島港をしのぎ早崎港の名が高かつたが年々港の内が埋つて滿潮の時二、五米干潮の時は干潟となるので船の出入が不便となつた。

海岸は一帶に遠淺で干潟の時は十町餘の沖まで干潟となり貝拾や虫堀りは數百千人に及ぶ。

新開

數百年前から開拓した土地が多くあるが徳川時代の末頃から開墾したものを擧げると、

五段田

徳川幕府の初頃頃末氏祖先が開いたといふ。今の大浦神社西校附近の地である。

古新開

天明三年大阪紀伊國屋喜平が開いたもので十五町歩ある。

中新開

天保九年窪屋郡笹沖の人四郎右衛門外五名が開いたもので十二町歩ある。

鳴瀧新開

天保十年安倉の人高淵富藏が開いたもので三町歩ある。

早崎新開

天保十年六條院の人藤澤仙十郎が開いたもので七町歩ある。

東新開

天保十一年窪屋郡笹沖の人高橋開作が開いたもので九町歩ある。

國頭新開

明治二年鴨方藩主が開いたもので二町歩ある。

お伊勢新開

明治三十六年より三年間西安倉の三宅松(通稱伊勢)が私財一千五百圓を投じて造

つたもので四段歩ある。

産　業

農　業

本町地質の大部分は花崗岩であるから、排水が良好で旱害に罹り易い虞ある代りに、乾いても粘土質の様に地割れが少く土中に水分を停滯する憂なく、酸素の供給が十分で稻の生育に適する、然しながら本町内には耕地が少く米穀は他郷から輸入してゐる。畑地は山の頂から海岸まで餘程開かれてゐる。

昔は棉花を澤山作つてゐたが、今では除虫菊、薄荷、養蠶が盛になつた爲め棉花は跡を絶つた。又甘藷は缺くべからざる食料品の一として多く栽培されてゐる。

除虫菊は大磯の人渡邊小平太が紀州から種をついだのが始で、本町へは明治三十四年東安倉の道廣宇八外七名が大島村正頭から種ついだ。

現在本町一年の産出高は二千貫乃至一万貫に達してゐる、價格は一貫につき大正三年頃は參圓位、大正八九年には拾參四圓にもなり、本年は四五圓である。この除虫菊は神戸大阪方面に積出され、日本全國の生産高(百二三十万貫)の半分は内地に使用せられ、半分は米國へ輸出してゐる。

養蠶は古くから行はれてゐたが明治三十年頃、蠶病のため從業者が非常に減じた。越えて大正八九年頃から再び復舊の運に向ひ、本年の調によると養蠶家は八十二、一ケ年の産額が一千五百貫である。其の價格は十貫につき七十圓位で本町の繭は多く笠岡商人に販賣されてゐる。

この養蠶業は年々增加して行く傾向である。

石　材

鏡から産する花崗岩は質が最も緻密で石塔材に適してゐる。

中安倉、東安倉から出る花崗岩は少し質が疎で到る所に散在してゐる。

鹽田業

鹽田業は花崗地帶の海岸に適するものである。本町は埋立が容易で鹽田を作るに便利であつたのと、土質が花崗地帶であるのとで斯の業が盛になつたのである。

製鹽業は德川時代の中頃からぼつ〳〵行はれたやうであるが、それが次第に盛になつて同業組合が組織せられ、明治三十八年專賣法が實施せられてからは品質が改良せられ二等鹽三等鹽が相半ばして採れるやうになつた。

今鹽田が二十八町歩あつて年產高は十五番の鹽田から四百五十万斤を產し、本郡內や笠岡、井原、福山方面へ積出されてゐる。

鹽百斤の價格は二等鹽で參圓五錢、三等鹽で貳圓八拾錢である。

大正十五年八月から昭和三年三月末日迄は鹽の生產高を制限されてゐたが、今では其の制限が無くなつたので年產高は多くなつてゐる。

工業

近時模造眞珠製造が次第に行はれ所々に原玉を作り、その加工場が早崎に建てられてゐる、又安倉には製帽工場があつて、人絹帽や麥稈帽を製造してゐる。

安倉、國頭は漁場である關係上舟や網も作つてゐる。

漁業

安倉國頭の九割は漁家である。一年間の賣上高は二十七万圓に達し縣下有數の漁場である。漁獲物の主なるものは春は鰆、鯛、烏賊で賣行先は岡山、倉敷、津山、龜甲、高梁、總社、成羽、新見地方へ送られ、其他の雜魚は地方へ賣捌かれる。

夏は小海老で大阪、倉敷方面へ送られ、他の雜魚が地方へ賣られる。

秋はいな、ぼら、つなし、こち、はも、海老等で全部近邊の祭典に供せられる。

冬は中海老、小海老、おこぜ、げた、こち、蟹、貝類で、中海老は東京へ、小海老は東京、大阪へ、赤貝は大阪へ、蟹は岡山、倉敷方面へ送り出される。

東京高等師範學校附屬小學校之印

特に名高いのは水島の鯛で風味よく中にも金山鯛（初鯛）は賛美せられ一貫目百參四拾圓の取引が出來る、大正十五年五月攝政宮殿下行啓の砌岡本儀八金山鯛を味噌漬として献上した。

他所から入り來る魚には鯖、鰆、鰯等がある。重に朝鮮、香川、愛媛、廣島の諸縣から輸入するのである。

漁獲法として主なものは

春はしばり網、流瀬網、烏賊曳網で、

夏は打瀬網

秋はぐり網

冬はげたこぎ網である。

内海漁業には打瀬網、魚桁打瀬網、まゝかり網、鰆流瀬網、蟹釣、縛網、五智網、瀬曳網、繰網、壺網、烏賊巣曳網、大手繰網、蟹流瀬網、投網、鰶曳網、曳網、沙魚網、章魚壺網、黒鯛釣等がある。

遠洋漁業は朝鮮近海が主なものであつて

鰡繰網、鰆流網、鰛網、巾着網（巾着網は全國で安倉特有のもの）、壺網、打瀬網等である。

この漁業こそは、この地方の生業の重要なものであるから、水産の一般的基礎智識を學習して將來益々研究を重ねて大發展を期せねばならぬものである。

魚市場沿革

嘉永年間中安倉に魚市場を建設したのが最初である。明治以前は個人經營として三ケ所に分立し、明治初年には矢張り個人經營で三力舍といひ、明治十六年牧尾寅太郎外有志者が共同の盟興社を起し間もなく安倉開墾地に社を建てゝ事業を擴張し改進社と改名した。明治三十一年に安倉生魚株式會社となり非常に發展した。當時の社長は平方勝三郎で、專務は牧尾寅太郎であつた。

專務は後に平方要三郎に代り明治四十四年から岡本儀八がその職を執つた。大正元年には解散の止むなきに至つた。

大正二年には三ヶ所に分立し、西榮魚市場（理事三宅一郎、龜岡魯一）と、旭濱魚市場（理事岡本儀八）と、東濱魚市場（理事平方治太郎）とに分れたが、大正四年に西榮旭濱両魚市場は合同して中西魚市場と改稱した。

大正十三年に中西魚市場を中西共同販賣所と改め岡本儀八が引續いて理事を務めてゐる。東濱魚市場を東共同販賣所と改め平方治太郎引續いて理事である。

蒲鉾製造

蒲鉾は今より五十年前に町内で始められた。今東安倉の中村賢太郎（川坂）平方與四郎（平與）川崎正治（角熊）の三ケ所で盛に製造せられてゐる。

原料は、はも、ぐち、えそ、ふか、にべ等で、年産高は約二万圓である。販路は縣下一圓に亘つてゐる。大正十一年には川坂製の蒲鉾を久邇宮朝融王殿下に献上して御嘉納に預つた。

商業

明治元年早崎港が出來てから問屋業をするものや商店を開くものが次第にふえて來た、眞田業が盛になつては眞田の集散地となり九州四國藝備の現品は一旦こゝに集まり纒めて發送した。その額は數十万圓に達した事もあつた。明治の末年から鴨方玉島其の他の諸驛に吸收せられるやうになつた。

麥稈眞田

この業は十六世紀頃にフランスで創めたもので我國では明治四年に東京府荏原郡大森村河田谷五郎が創めた。岡山縣では明治十七年時の上房郡長時任義富が有志者と相談して高梁町中村三平を大森につかはして習はせた。翌十八年三月に歸つて高梁町に開業し翌十九年に津山や寄島にひろがつた。津山は不成功であつたが寄島は大へん上首尾であつた。

寄島で始めてやつたのは頃末常吉其の外數名であつた。これ等の人は寄榮組を組織し高梁から先生を賴んで來て女子供を雇入れて習はし、これからこの地方にだん〳〵弘まつた。寄榮組は當地第一の工場であつて一ケ年の製造高が二万一千六百三十三本價格五千九拾七圓に達してゐた、この外に陶山組坂本組永清組等があつた。頃末常吉は後寄榮組を出て獨立して錦紐五捩紐等の變製品を始め神戸の貿易商津川信太郎を經て輸出することにした、明治二十六年歐洲向の太眞田がずん〳〵賣れる樣になつてから非常に景氣が好くなり盛に製造する樣になつたから買入業の信久組を起して支店を設ける樣になつた。

明治二十七年には香川縣大川郡相生村から眞田に適する麥種を買求めに來た、是れから次第に各府縣から視察に來たり傳習生がやつて來たり講師に依賴されたりする樣になつて、大へん盛になつた。

明治二十八年三月淺口郡麥稈眞田紐業組合を設けた

組合長　中濵芳太郎　副組長　中村　準
取締　齋藤壽太郎　出納書記　遠藤友八
審査員　村上森造　矢切芳太郎　三宅民造

眞田業は小兒婦女子の副業的手技品として容易に出來るもので大正八九年頃は一日に一圓五六十錢の收入もあつて當時は官公吏の普通月給高は二十數圓であつたから小兒の收入は大人を凌ぐものがあつた。こんな關係で隣縣は勿論富山愛知山口の諸縣も之を倣はうとした、明治三十九年には麥稈眞田の共進會が開かれた、本町の蔦川喜平は菱千鳥(五圓)千鳥捲(五圓)磯波打(五圓)磯波千鳥打(七圓)等の意匠品を出品して一等賞牌を得た、喜平は又眞田紐百數十点を本縣物産陳列場へ出品した、斯業が盛になつて外國の博覽會へも出品した。

明治三十九年には陶山三郎等は米國市俄古閣龍博覽會へ出品した。

明治三十一年に岡山縣麥稈同業組合を組織することになつた。

眞田業の最も隆盛であつたのは明治二十九年で、今その統計を調べて見ると

製造高は約三十六万反

價格は約拾參萬六千八百圓

製造戸數は約一千戸

職工は約二千人である。

製稈業

寄島に眞田のはじまつたのは明治十八年頃であつた、明治三十五六年になつて眞田を編むことが廣島九州地方にも始まつたが原料の麥稈がないので此の地方の麥稈を割つて眞田を編むまでにしたものを送ることが始まつた。これが製稈業の始まりで主として金浦寄島地方から一ヶ年二百万反乃至二百五十万反の眞田を編む丈けの麥稈が廣島縣及福岡縣地方へ送られてゐた、現在でも片本濱の坂本、西島両商店と東安倉の川崎商會とに製稈を行つてゐる。川崎商會では五十餘名の職工が居て毎年七八十万反の原料を作り出し廣島及吳方面へ送つてゐる。

漂白稈製造

今から十年ばかり前ルートン式漂白法が傳つて來た、我が國でこれに最初手を出したのは神戸市島岡商會である。この方法は水の中へ藥品を入れ適當な溫度に溫めておいて麥稈を入れる、そして一週間乃至二週間位其の中に浸し、それから出して乾かすのである、そうすると麥稈がすき透つた樣に奇麗になる。

寄島では昭和二年五月川崎商會に始めたのが一番始めで今盛んに製造されてゐる一日の製造高は四五十貫で價格は一貫の漂白麥稈が六七圓である。

これは帽子になるのが大部分で一部分はソーダ水等の吸ひ口に利用されて全部阪神地方へ送り出してゐる。川崎三市漂白稈製造の主任となつて獨特の漂白法に依つてゐるのであるが尙ほ日夜研究を續けて精製に盡瘁してゐる。

この外中安倉の岡邊隆一商店にも漂白稈の製造に從事してゐる。

町役場

昔名主時代には別に役場はなくて自分の宅で、事務をとつてゐた。明治九年寄島村が出來てからは民家を借つてゐた。今の役場は明治二十四年に建てたものである。

住所	職名	氏名	期間
中大島村	大庄屋	原田三郎右衛門	
安倉	庄屋	鈴木直四郎	
安倉	庄屋	鈴木謙齋	
安倉	庄屋	鈴木忠太郎	
宮通	庄屋	田中善之助	
宮通	庄屋	田中善太郎	
宮通	庄屋	田中馬之丞	
	副戸長	原田新造	（自明治九年）
六條院	副戸長	大西京平	（自仝　年）
	戸長	日下部愛二	（自明治十一年）
早崎	戸長	齋藤樂二	（自明治十七年）
寄島村	村長	鈴木忠太郎	（自明治廿三年）
寄島村	村長	藤澤重三郎	（自明治廿六年）
寄島村	村長	齋藤樂二	（自明治廿九年）
寄島村	村長	道廣忠讓	（自明治卅三年）
寄島町	町長	山室精一	（自明治卅四年）
寄島町	町長	齋藤樂二	（自明治卅五年）

寄島町　町長　龜岡魯一　（自大正三年）

現在の吏員は

町長	龜岡魯一	書記	高淵鷹一
助役	荒川豊一	書記	竹本幸夫
助役	村上槇太	書記	陶山良正
收入役	吉川倫正	農會技術員	大橋明夫
書記	吉田二月	以上九名	

學校

江戸時代に學問する所を寺小屋といふてゐた、その先生は農業をしてゐるものが多く、神官、僧侶、醫者、儒者、庄屋などもゐて習字を教へることが主な仕事で、素讀や、そろばんも授けた。大抵七才になると寺入りといつて卯月八日に始めて入學し、十二三才で退學してゐたもので授業は朝八時に始り、晩の四時に終つてゐた。休日は大てい一日、十五日、五節旬である。維新後に啓蒙社をこしらへて、少しは教育が進んで來た。明治六年三月から安倉に鳴瀧小學校、東大島に日新小學校が出來てだんだん進歩した。寄島東尋常小學校については前に揚げてある。今の西校は初め日新小學校といひ、早崎の民家を借つてゐたが、明治十四年校舍を建てかへ、明治二十年高等日新小學校を併置してゐたが、二年で生石高等小學校に合せられて、尋常小學校となつてゐた。

明治二十三年寄島尋常小學校と改まり、其の年校舍を大浦に移した。明治二十四年高等小學校を併せ置いた。

西校の校長先生は、

小川　屯　（明治六年から）
島田環造　（明治十五年から）
佐藤岩藏　（明治十八年から）
妹尾弘通　（明治十九年から）
島田環造　（明治廿一年から）
岡崎多喜磨　（明治廿五年から）
島田環造　（明治三十三年から）
深井義之　（明治三十四年から）
安田　績　（明治三十四年から）
森里孫作　（明治三十五年から）
淺野辰之進　（大正六年から）
中尾孚一　（大正十年から）

安藤直一　（大正十三年から）

兒童數は七百五十人である。

寄島西尋常高等小學校職員名　（昭和三年七月一日現在）

校長	安藤直一	本正	渡邊政子
本正	井上正	尋正	田村初江
本正	森原官一	專正	松枝マツノ
本正	淺野準	小准	笠原春子
尋正	久戸瀬京一	小准	佐藤都
本正	安倍時夫	小准	黑川カスミ
本正	清水文四郎	尋准	兼信清
尋正	小川屯	校醫	小山弘
本正	景山きみよ		
尋正	藤井敏夫		

以上十八名

女學校は最初附設裁縫專修學校といひ、明治三十五年から始まり、小學校卒業女子が裁縫を習つてゐたが、大正十三年から、寄島女學校といふ樣になつて、女子教育が進んだ。生徒數は百五十名である。

寄島實科高等女學校職員名（昭和三年七月一日現在）

校長	安藤直一	教諭	景山きみよ
教諭	佐藤繁太郎	教諭	小山房子
教諭	松本義正	教諭	内海節子
教諭	佐藤春江	校醫	小山弘
教諭	中桐榮	以上九名	

郵便局

昔は飛脚といつて、手紙をまとめて持つて行つた。けれ共今の郵便のやうに、どこの家へも配達したものではない。明治維新になると、信書郵便法が出來、明治四年には切手を貼用することになつたが、僻遠のこの地方には中々行はれなかつた。

明治六年郵便取扱所が出來て、普通郵便が配達される樣になつた。明治十八年には貯金を扱ひ、明治廿九年には小包郵便を、明治卅年には電信を、明治四十三年からは電話を取扱ふ樣になつて大へん便利になつた。

警察署

明治三年に保防といふものを置いて、地方を警備してゐた。保防は樫の棒を脇にはさんで、洋服を着て廻つてゐた。明治八年に巡査といふ樣になつた。

明治十年早崎分署を置いて、巡査が三人位いつも仕事をすることになつた、寄島分署と名をかへてから四年程した時、分署もなくなつた。明治十九年から寄島交番所を置き、間もなく寄島在勤所といひ、又寄島駐在所といふやうになつて、巡

査が一人ゐた。明治三十九年から巡査部長派出所を置いた。そして警察事務を督勵した爲めこの町の惡風が、次第になくなつた。大正十年から警部補派出所を置いた。

警部補

佐々木孝一　（自大正十年四月）
福原半治郎　（自大正十一年）
齋藤　子　（自大正十一年）
德田久太郎　（自大正十二年）
植原治平　（自大正十三年）
津島與志夫　（自大正十三年）
川村覺二　（自大正十四年）
粟井繪一　（自大正十五年）
柴田直一　（自昭和二年）

水上警察署は明治二十九年から安倉に置かれた。

塩務局出張所

明治三十八年專賣法が出來てこの地に塩務局の出張所が置かれた、後所名は度々變更した。始めは味野塩務局寄島出張所といひ、明治四十年十月から味野收納所寄島出張所となり、明治四十一年四月から味野專賣支局寄島出張所といひ、大正二年六月から岡山專賣支局寄島出張所といひ、大正十三年十二月から、出張所を廢して、岡山縣專賣支局寄島地方取扱所となつた。

塩務局出張所長名

松田幸太郎　（明治三十八年四月一日から）
堀　好五郎　（明治四十二年から）
前野又郎　（明治四十二年から）

田中國太郎　（明治四十三年から）
堀　好五郎　（明治四十三年から）
堀　義郎　（大正二年から）
村上長義　（大正二年から）
岡村恒三郎　（大正三年から）
畠山源三郎　（大正五年から）
森川猪次郎　（大正十二年から）

寄島取扱所書記

山下末樹　（大正十三年から）
馬屋原元一　（大正十四年から）
西島庄右工門　（大正十五年から）
小山重喜　（大正十五年から）

河野　薫　（大正十五年から）
西島庄右工門　（大正十五年から）
馬屋原元一　（昭和二年から）
小山重喜　（昭和三年から）
河野　薫　（昭和三年から）

銀行會社

銀行には

株式會社鴨方倉庫銀行寄島出張所が明治三十三年に開かれ後第一合同銀行に合併してから寄島出張所を置いてゐる。

會　社

模造眞珠を製造する頃末洋行寄島分工場がある。昭和二年一月頃末榮次が創設し

た。女工三十名程働いてゐる、年産額は四万圓に達し重に西洋各國へ賣り出す。

工　場

早崎ヤヨイ製帽株式會社寄島分工場と中安倉の主御門製帽所があつて人絹帽を製し輸出品である。

どちらも四十臺の機械を据えて女工四十人が働いてゐる、原料は麻、人絹、コヨリで價格は一打拾八九圓である、これは加工しないで西洋各國へ送り出す國産品である。

麥稈帽製造の岡邊製帽所では一文字帽や勞働帽を作り、職工十四五人居て一年三千打製造され一工場としての産出高は岡山縣第一位を占めてゐる。この品は大阪で取引をせられ神戸から支那南部に輸出されるのである。

製網工場としては中安倉の森田重吉の經營にかゝるものがある。大正十一年から機械十臺を据付け、女工が十名働いて打瀨網、桝網、繰網の製造に從事し一年の製造高は一万尋である、原料は二十番の綿糸撚糸で大阪濱松金澤方面から仰いでゐる。

諸　團　体

寄島町青年團

明治四十三年九月二十四日を以て發會式を行つた。當時は東西の両分團に分れ、其の分團が若干の支部に分れてゐた。その時の團長は町長齋藤樂二で東分團長は東校長田邊靜太、西分團長は西校長森里孫作であつた。その後種々の變遷があつて今は全く分離して安倉青年團と寄島青年團になつて諸種の事業を行つてゐる。

現在に於て安倉青年團は三支部に分れ團員が二百餘名ある。始めよりの團長名は

1東勝平　2服部鹿太郎　3福島春太郎　4久戸瀨京一

の四代目である。

現在に於て寄島青年團は九支部に分れ團員は三百餘名である。始めよりの團長名は 1森里孫作 2淺野辰之進 3中尾孚一 4安藤直一 5吉田二月の五代目である。

消防組

明治二十二年から始まつて今では十部に別れてゐる、そして毎年聯合の消防演習を行ふことゝなつてゐる、大正十二年縣より表彰旗を戴いた。

第一部	福井	部長 高田一男
第二部	宮通、山根	部長 田中宗三郎
第三部	早崎	部長 山下義雄
第四部	國頭	部長 三宅和七
第五部	西安倉	部長 松倉千代吉
第六部	中安倉	部長 妹尾正志
第七部	東安倉	部長 道廣源次
第八部	片本	部長 山田長市
第九部	青佐	部長 住吉荒一
第十部	尾燒	部長 三宅京松

組頭		副組頭	
道廣忠讓	(明治二十二年より)	笠原敬之助	
岡部鉄太郎	(明治三十年より)	應本治郎衛	
龜岡魯一	(大正三年二月より)		
三宅仁平	(大正六年二月より)		
國本武男	(大正九年二月より)		
山本平助	(大正十五年一月より)		

漁業組合

國頭安倉の漁業者を以つて組織し漁業の發達を圖つてゐる。

寄島町農會

明治三十二年に始まり農民を以つて組織し農業の改良發達を圖つてゐる。

農會長	副會長	年月
齋藤樂二	平方與一郎	自明治四十年
村上準一	平方與一郎	自明治四十二年
大島龍太郎	平方與一郎	自明治四十四年
田中文四郎	鈴木豊吉	自昭和三年

衛生組合

明治三十四年縣令によつて成立されたものである。

第一區　宮通川以西

第二區　宮通川以東國頭以西

第三區　西安倉

第四區　中安倉

第五區　東安倉

帝國在郷軍人會寄島町分會

本町軍人會は明治四十五年から始まつて左の事業を行つてゐる。

一、招魂祭(福井山龍城院で毎年舊三月四日行ふ)

二、入營者の慰問

三、在隊者家族の援助並に慰問

四、射撃會(九月節句に福知射撃場で行ふ)

五、名士講演

六、活動寫眞一般公開

七、戰死者墓參（舊盆十四日）

分會長副分會長氏名

分會長氏名	副分會長氏名	年月
大室佐市	今井惣太郎	自明治三十九年
三宅多次郎	今井惣太郎	自明治四十五年
荒川三保太	三宅鶴吉	自大正三年
山本伊助	三宅鶴吉	自大正五年
山本伊助	岡本儀八	自大正六年
大室友一郎	岡本儀八	自大正七年
三宅健吾	田中勝治	自大正九年
田中勝治	原田脩平	自大正十年
岡田利助	原田脩平	自大正十一年
原田脩平	欠員	自大正十三年
山本平助	川崎一郎	自大正十五年
	原田脩平	自昭和二年（本年より副分會長二名となる）
理事 今井清	理事 荒川昻	理事 高淵鷹一
監事 竹正弘一	幹事 光枝正道	

寄島町信用組合

大正十五年から始められて金融を圖つてゐる。組合員八百四十名で出資總額壹萬貳千五百圓貯金總額拾九万圓を突破し貸付金總額拾貳万圓餘で尙ほ益々長足の發展をなしつゝある。

現在役職員氏名は次の通りである。

理事長 頃末賢雅　常務理事 平方與一郎

常務理事 原田義逸　理事 齋藤若松

理事　三宅仁平　　理事　高淵虎太郎
監事　龜岡魯一　　監事　川崎淺次郎
監事　山本惣一　　監事　佐藤房太郎
書記　三宅梶太

交通

明治九年に道路規則が出來て國道縣道里道の三種に分れた。

黑崎往來

黑崎に通ずる往來にして始は車馬も通れない狹い道であつた。明治十七年八月大海嘯のため安倉邊の道は大破損し官に賴んで修理し、ついで大正三年に南浦へ越す今の道路が出來た。

大島往來

西隣大島村に通ずる道である、もと片本坂が不便である爲め明治三十一年陶山三郎板權一等の有志者が土地や金錢勞力を寄附して長さ四十二間幅一間の迂廻線を拵へたがまた車馬の往來は出來なかつた、大正五年改修して今の道路となり小型自動車が通ずるやうになつた。

鴨方街道

早崎から鴨方驛まで通ずる往來にて明治三十二年三月から六月までかゝつて改修し便利となつた、今は縣道に編入して昭和三年に大改修せられ自動車が二臺並んで通れる樣になつた。

安倉越

安倉から六條院東を經て大谷に通ずる山道であつたが大正三年に改修せられ道路も擴張し自動車も通ずる樣になつてゐる。

海上交通

發動機船約十隻が西は尾道笠岡、東は玉島へ定期或は不時に航行してゐる。貨物としては木材石炭等を買入れや塩の積出しをしてゐる。

舊　蹟

寄　島（三郎島）

昔神功皇后が三韓を御征伐になつて御かへりの時御船をこの島に寄せられたので寄島と名を付けられたのである。

皇后は群臣を率ひて上陸され神々を祀られ武功をお告げ申された。そこで島の人がお宮を建てゝ人々が敬つてゐた。鎌倉時代から賑やかな御祭をする樣になつてそれが今もつゞいてゐる。島の内に苫蔭と云ふ所がある、そこに清らかな泉が今も湧き出てゐる、これがその時の御用水であるといふ、宮の谷には八幡宮の跡がある、今は寄島を三郎島といつてゐる、これは町の名とまちがひ易いからである。

青佐山城趾

山の頂は三段になつて上から順に一の丸二の丸三の丸があつた、こゝへは大内義隆が始めて保壘をこしらへたのである。毛利氏が備中全部を領する樣になつてから永保二年毛利氏の親族伊豫國川之江城主細川下野守通董をこゝに居らし六万石を領した、通董は城を青佐山に築いて永祿二年から八年まで七年間居り永祿九年から天正二年まで龍王山城に移り又鴨方城に居た、淺口殿といつて大へんな勢であつた、そこで家來の大島兵部村上備後守景盛原田惡右衛門尉原田和泉守種雅等をつかはしてこの青佐城を守らせてゐた、原田和泉守種雅はその後中大島に住んで代々村長となつた。

或年九州の大内太郎右衛門がこの國に攻め入らうとしてこゝにやつて來ると通董父子は之を青佐正頭の濱に打ち破つて敵軍を豐後に還らしたこともある。

天正年間羽柴秀吉が備中に攻め入つた時備前の宇喜多氏と一緒になつて毛利氏を

攻めた、嬉和の後本郡は宇喜多氏に領せられ青佐山城も廢せられた。

龍王山城趾

寄島町と六條院の境に峙つてゐる二百九十米の山は今こそ木はないが維新前には大きな樹が晝も暗い程生え茂つてゐて要害の所であつた。頂上に平たい廣い場所がある。こゝに城があつた今でも一の丸とか二の丸とか三の丸と呼んでゐる。こゝは吉野時代頓宮又次郎が居城し天正の頃には細川通董が據つて居た所である。

青佐山台場

青佐山の南側の中程に舊砲臺の趾がある、これは德川幕府の終項攘夷論が盛んになつて海防の必要を知り文久三年鴨方藩主のこしらへたものである。先づ奉行岡本甚左衛門が土地を調べ渡邊多惣治が設計し吉田某が工事を監督してこしらへた。出來上ると備前侯茂政や鴨方藩主政詮が來て檢査をした、其時砲彈は漸く三郎島附近に達したといふ、その後藩主渡邊淡水が之を守り廢藩となつて廢せられた。砲車の一部は今尙寄島西校に保存されてゐる

棄石

明治三年京都府白河村の人西村四郎左衛門が鴨方藩主の助をかつて百町ばかりの新開をこしらへようとした藩主は之を許し上米五百石と金千兩を與へた。四郎左衛門は大へん喜んですぐ工事にとりかゝり龍王山の松の木を伐つて枠を拵らへ石をなげ入れて工事が進んでいつた、その時丁度廢藩となつて四郎左衛門は俄かに金を出して貰ふものがなくなつて成功することが出來ずそのまゝ今に棄石となつて殘つて居る。

古墳

東安倉鳴瀧より西二町ばかり畑の中に露出して一部分破損して居るが原の形を殘し奥行三、五米巾一、五米高さ一、二米ある。この外二つあつたが一つは破損した。

奇石

鏡の丘の上に平たい大きな岩がある、東西六、五米南北五、八米あり、それが洞窟になり其の中に鏡權現宮を祀つてある。

燈明岩

東安倉の山腹に大きな岩がある昔神功皇后三韓征伐凱旋の時お寄りになつて神を祀られた、その時土民がこの岩にお燈明して神をお祀したといふ岩である。今は八疊岩といつてゐる。

原田惡右衛門之墓

細川通董の家來原田惡右衛門秀家は靑佐山城を守つてゐたことがある。原田和泉守種雅と同族である、慶長十五年死んで鏡山の中腹に葬つてある。種雅は中大島に土着して子孫代々その地の大里正(村長)となつた。

神社佛閣教會所

安倉八幡宮

安倉八幡宮は安倉にあつて應神天皇仲哀天皇神功皇后の御三方をお祀りしてある神社である。本殿の創祀は明らかならざるも、元祿二年に再建す、(棟札ニアリ)明治二十年屋根の葺替小修繕を行つた。拜殿は大正四年御大典記念として六十日間に竣工したものである今の繪馬堂が以前の拜殿を移したものである。安倉六百六十六戸の氏神で境内は三町五段四畝の廣きに及び後方は峨々とした山を脊ひ前は洋々とした海を控へて脊景眺望二つながら備はり風光絕佳の地である。第二鳥居の直ぐ東に隣つて樟の老木がある、六七百年以上にもなる神木である。境内の大部は風致保安林である。お祭は十月三日であつて神技(ジンギ)として御輿三体千歲樂三臺お舟一隻奴競馬の賑はしで境内は人を以て埋まる。

神官

往古の事は記錄明かならざるも寛文七年鈴鹿上總守祠官に任ぜられ子孫連綿とし

て今日に及ぶ上総—宮内—帶刀—大藏—權頭—宮内—義信に至る七世其子龜（自明治九年十月至明治四十年三月）多喜二（自明治四十一年十月至現在社掌）九世であつて六條院村眞止戸山神社の神官を兼ねてゐる。

境内の建造物としては一の鳥居二の鳥居三の鳥居唐獅子二對、注連柱二、燈籠六對一基、玉垣、百度石三、手水鉢二、繪馬殿一、神庫一、お日待堂一、砲丸（明治二十九年一月）大典記念社殿改築碑（大正四年一月）二、である。此外に個人として寄進した末社には松尾神社、宗忠神社、吉備津神社、眞止戸山神社、稻荷神社、木野山神社、多賀神社、天王社、金刀比羅宮、三峯神社、沼名前神社、荒神社がある。

基本財産としては有價証券百九拾圓現金五百九拾圓田九畝十五歩である。

大浦神社

應神天皇仲哀天皇神功皇后をお祀りしてある。元和三年寄島宮の谷から今の大浦へお遷し申しお宮を大きくして境内を廣くし馬場をこしらへ松を植えた。寶暦十二年建てかへ文政元年本社の屋根を葺き換へた。明治三十年幣殿と拜殿を建てかへ昭和二年十月二日に本殿を建てかへて盛な上棟式を行つた。

昔は細川氏の崇敬を受け江戸幕府時代は新庄濱中西大島東大島五ケ村の氏子であつたが明治の御代となつて東大島の氏神となり他の四ケ村は大氏子となつた。

毎年十月三日がお祭の日で此の日は競馬もありお船や奴や千歳樂や御輿も出て賑はしく境内は人の黑山である。

八幡神社

應神天皇仲哀天皇神功皇后をお祀りしてあつて元祿二年に建てたものである、お祭は舊暦の四月三日と九月九日である。

金刀比羅宮

早崎にあり大國主命を祀つてある宮で天保年間建てたものである。お祭は舊暦十月十日で餘興に相撲がある。

嚴島神社

早崎にあつて市杵島姫命を祀つてある。毎年舊暦六月十七日のお祭には隣村から大ぜい參つて大へん賑やかである。

三郎島の嚴島神社もこの日お祭をする。

早崎神社

明治十年コレラ病が流行した時町民は大へん心配して木の山宮をお祀りしたのに始まつた。

尾燒天神社

菅原道實を祀つてある、御神體は細川通董が青佐山の上に祀つてあつたものをこゝにお遷ししたものである。お祭は九月十九日である。

稲荷神社

早崎嚴島神社の境内にある食物の神、倉稲魂神を祀つてある。

荒神社

町内どこの部落にもあり。三寶荒神を祀つてある。三寶荒神は人の福を奪ひ障をし貧乏災難を起す神である、これを祀ればそれらの禍をのがれるのである。

白髮大明神

中安倉の荒神社後上方の岡に鎭座す。安倉始りての古い社である。

大明神

東安倉にある、明神は神樣といふ意味である、どんな神樣を祀つてあるのかわからぬ。

登神大明神

鏡にあつて高藤登之進を祭神とす。信徒二百數十名で岡山市に分祀し岡山地方か

らの參詣者が多い、毎月舊十七日に月並祭を行つて祈禱してゐる。

惠比須神社

中安倉にある、大國主命の御子事代主神を祀つてある。事代主神は鯛を釣ることが上手なので漁業家は春鯛出魚の時はお祭をする。境内は七畝十五歩ある。

龍城院

天台宗のお寺で承和五年慈覺大師の建てたもので阿彌陀佛を祀る。細川通董の祈願寺で通董の女の墓地である。古は月光坊といつて今の鐘樓のある所にあつたが火災に罹つて建てかへた。天和九年本堂を今の所に移し寶暦九年本堂を建てかへ大正八年大修繕を行つて今に至つて居る、今は福井山龍城院壽福寺といひ寄島槃町及大島村の中で二千餘の檀家がある。行事には一月一日の修正會、二月十五日の若會、四月の招魂祭、五月の釋尊降誕會、六月の傳教會、七月の宇蘭盆會、十一月の天台會と毎月十五日の説教である。寶物として佐野紹益筆の法華經寫經八軸と尊円親王筆の和歌二首と明治十八年手にした縮刷藏經がある。寺の東の小山に忠魂碑が建てゝある。維新以後西南の役、日清、北清、日露の戰役に、戰死した本郡の軍人のみ靈を後々までも祀るために明治四十一年に建てた。碑の文字は野津元帥の筆である、毎年春盛な招魂祭が行はれてゐる。東西両校兒童教師全部整列參拜す、お寺から忠魂碑へ行くのに橋がかけてある。これを忠魂橋といふ。橋の下は道路と河である。昔この邊に十二坊があつた。

月光坊　今の龍城院の前身である。

西　坊　福井山の西方中大島分にあつた。

大　坊　西坊の東にあつた。

福知坊　福井山の南一丁位の所にあつた。

東光坊　中大島柴木にあつて石門山といつてゐた。

円城坊　宮通にあつた。

鏡　坊　鏡にあつた。

南光坊　中大島にあつた。

弘誓坊　福井（今の横山邸の附近）にあつた。

山本坊　鏡にあつた。

今境内には地藏堂（明治二年）供養塔三基、法華塔一基、亭、鎭守堂、鐘樓（天和九年）洗心亭（明治十年）六淨閣（大正二年）があり廣さ二町九反九畝ある。

龍城院法師

信亮（享保）―眞現（明和）―眞晁（明和）―眞敬（明和）―寂雄（明和）―亮晧（文化）―性衍（寛政）―円潮（寛政）―隨範（文政）―惠燈（嘉永）―永睿（明治）―智信（大正）―智正（現住職）

円珠院

安倉西六の八百五十七戸の檀那寺で六條院村西六にあり櫻見山阿伽井場長福寺といつて阿彌陀如來を祀つてある。脇立として不動尊と毘沙門天を祀つてある。比叡山延暦寺末で承和五年慈覺大師が創建したものである。天文年間に再建した。現在の本堂は寛文五年に建てたもので境内には元祿十二年の庫裏、安永五年の鐘樓、文化四年の法華塔、地藏堂、護摩堂、鎭守堂と供養塔がある。寶物として惠心僧都筆の三尊來迎佛畫と豪湖律師筆、密成賛の慈覺大師畫像と德本上人筆の六字名號と行基作の聖觀世音菩薩及び池田信濃守寄附の辨財天女像がある。

現住職は柆田信盛である。

不動樣

東安倉にある舊正月十六日に會陽が行はれる。詳しいことは年中行事の中に述べてある。

觀音樣

中安倉、西安倉にあり觀音樣は佛敎で菩薩のことである。大慈大悲をもつて多く

のものを幸福にして下さる。阿彌陀如來について極樂に居て左手を臍にあてゝ蓮の花を持ち、右手を胸にあてゝゐる。

藥師樣

東安倉にある。藥師如來を祀つてある。

塞の神

東安倉にある。諾册は黃泉平坂で岩石を中にして離婚を宣し給ふたといふ、この石をまつる。

大師樣

東安倉、中安倉、西安倉にあり、弘法師をお祀してある。

尊城院海樂寺覺禪坊

東安倉にあつて修驗道の一派である。醍醐天皇より寺號坊號を賜はつて、明治維新迄は十六菊花の御紋章を許されてゐた。

地藏樣

西安倉にある。地藏菩薩は忉利天に居て多くのものを救つて下さる。菩薩である。

大社教寄島教會所

西安倉にある。大國主命を祀つてある。大正六年創めて建つた。信徒講社の寄進にかゝる。所長は長谷川日向で祭典は春四月十八十九日と秋九月十八十九日である。

金光教會所

東安倉にある天地金の神と教祖金光大神を祀つてある。明治三十五年十一月創めたもので所長は澁谷重吉である。祭典は四月十七日と十月十七日に行はる。

天理教會所

福井と國頭にある、天神地祇八百萬神を祀つてある、國頭にあるは岡山分教會倉敷支教會寄島宣教所といひ大正三年十一月に創設され所長は岡崎佐與松である、信徒六十餘名。福井にあるは岡山分教會倉敷支教會陽寄宣教所といひ大正十五年

創設せられ所長は立石管一である。信徒は五十餘名ある。

沿革

昔神武天皇が九州日向の高千穗の峯から御東征の時この吉備の地に八ケ年もおとまりになられた。當時吉備の地は氣候もよく作物も豊で人情溫良で早くからよく開けて人が多く住んでゐた所である。この寄島附近の山が丁度島であつて今の海岸は海の中にあつたものである。それがだん〳〵陸地となつて、そこに田畑が出來町が出來て今の樣になつたのである、崇神天皇の御代四道將軍として吉備津彦乃命と稚武彦命の御兄弟がこの地方にお出でになつて治められた。そして御子孫つづいてお治めになり益々繁昌せられて吉備氏の内から皇后にお立ちになつたり宮仕へする者がだん〳〵あつた、こんな風で都と吉備の地との間は往來が多かつた。ことに神功皇后は三韓御征伐のお歸りの時この寄島の地に御上陸になり天地の神々に武功をお告げ申されたこともある。

奈良時代からは國々に國司といふ者が居て治めることになつた、この地方を治める所は吉備郡服部村金井戸にあつた。國司の中でも清和天皇の御代の藤原保則といふ人はよく人民を愛して人々から敬ひ慕はれた。

鎌倉時代には諸國に守護職を置いて治めたこの地方へは土肥實平や梶原景時が守護職となつて眞庭郡に居て備前備中を治めた。

吉野時代の初頃はこの地方は官軍についてゐたが尊氏起つてその領地となり高師秀が備中の守護職となつて治めた。この時代に寄島龍王山城や鴨方の鴨山城も始めて築かれた。

室町時代足利義滿の時細川頼之の弟滿之が備中守護となつて上房郡井の山に居た。應永十四年には細川頼之の孫滿國が守護職となり本郡の鴨山城に居て治めた。それから滿國の子孫がつづいて七代百二十年間治めてゐた。

戰國時代は群雄があちこちに起つてこの邊には細川氏が鴨山城を本城とし青佐山龍王山六條院泉山佐方龍王山道越要塞山柏島森本松山城柏島畑山城柏島龜崎城等に支城を築いてゐた。

穗井田氏は小田郡猿掛城を本城とし占見加賀山城上竹城山柳井原梁場山城柳井原南山城等を支城としてゐた。大内氏は河内片島城大原鳶尾山城大島茶臼山寄島青佐山に城を築いてゐた。

これらの三氏が互に爭つてゐたが天正三年毛利輝元が備中全部を攻め取つたので皆毛利氏のものとなつた。

織田豐臣時代、永祿元年宇喜田直家が鴨方を攻めて城主細川通政を殺した。そこでその子通董は毛利氏の家來となつて伊豫國川之江城から鴨山城に移り滿國より七代目の城主となつた。そして青佐山や龍王山に城を築いてこの地方を治めてゐた。

天正十五年秀吉が九州の島津氏を伐つた時通董は毛利輝元について出征し凱旋の途中赤間關で死んだ。そこで子の元通があとをついだ。

元通は淺口少輔九郎と號して輝元から一万石を貰つて道越要塞山城に居た。文祿の役に輝元に從つて蔚山に籠城し秀吉から感狀を賜はつた。慶長五年關ヶ原の役に毛利氏は西軍について負けたので備中の領地を削られ、毛利元清とその子秀元は長府に移つた。鴨山城主細川元通も毛利氏について長府に行つたからこの邊の城は無くなつた。

江戸時代には池田光政(三十二万石)の領地であつた。寛文十二年光政の二男信濃守政言が鴨方藩一万五千石を分封せられてから明治四年廢藩になるまで二百數十年間子孫あいついで本町を治めた。

この町は平安時代は大島卿といひ鎌倉室町時代は大島庄といひ江戸時代には東大島(宮通、尾燒、鏡、青佐、寄島、國頭)と六條院西村の中の安倉(慶長五年六條院西村から移住)から成り明治元年には早崎が出來た。四年に鴨方縣となり、四年十一

月深津縣となり五年六月小田縣となり八年十二月岡山縣となつた。明治九年寄島村といひ三十四年寄島町といふ樣になつた。

風俗習慣

七夜

子が生れて七日目を七夜祝といひ名前をつける、母の里から産衣や赤飯を贈り親族や知人を招いて祝宴を張り餅又は赤飯を配る。

宮參り

子が生れて男は百十日目、女は百二十日目を百日（ももか）といつて甘酒を造つて神樣に供へ子供を抱いて氏神樣へ參る、この日親類や近所へ甘酒を配る。

初節句

生れて初めての三月三日を女子の初節句といひ親類や知人から雛人形を贈り、五月五日を男子の初節句といひ親類や知人から鯉のぼりを贈る。

誕生日

子が生れて滿一年目に祝餅を持つて子供を抱き氏神に參る、力試しといつて子供に餅を負はせて歩かす、近所へ誕生餅を配る。

紐落

子が生れて三才になれば始めて三つ身の着物を着せ帶を結ばせて氏神に參る、子供の着物は大てい母の里から贈るのが普通である。

入學

滿六才になると皆父兄に連れられて小學校に入り入學式を受ける。

元服

男子十五才から二十五才まで青年團員となり色々の修養事業に活動する。

婚禮

媒酌人が男女両方の意嚮や性質、操行、學識、職業、財産、血統等を調べて考へ合せおよそ適當たと思ふと周旋を始め両方に談し合ふ、すると両方から先方の事を聞き合し、緣談が出來る見込が立つと、媒酌人は男子を連れて女子の家に行き見合ひをする、話がきまると「固め」といつて結納をとりかはす。

婚禮の當日は媒酌人夫婦は新婦を連れて新夫の家に行つて式を擧げる、その時新婦の近親者數人と下女などが同道す、新婦の荷物は大てい人を賴んで賬はしく運んで行く、式は大てい夜で媒酌人のさしづで三々九度の盃をとりかはす、この時近所の人が多勢見に來ることがある、その時新婦の土産として「嫁菓子」を配つてやる。結婚翌日新婦は舅姑に連れられて氏神に參る。この日近所の者や知人から祝儀として金品を贈り婚家では親類の者や近所の者知人を招いて披露の宴を行ふ。

三日目に里方の父が始めて婚家に來て餅赤飯を贈る。婿が始めて嫁さんの實家へ行くのを舅入りといひ、嫁さんが結婚後初めて親の里へ行くのを「里がへり」といふ。

賀壽

三十三才、四十二才を厄年といひ、その年の舊の二月一日厄拂の祈禱をし餅をつき親類や近所へ配る、そして親類や知人を招いて祝宴を催す、親類や知人からは祝儀として酒肴を贈る。

六十一才を還歴祝といひ七十を古稀、八十八を米壽の祝といつて長壽を祝ふ爲め親類や知人を招いて宴を張る。

葬儀

死んだものがあると近所の者が集つて親類や知人に知らせ葬式一切の準備をし、お寺の僧か又は神主教導職に賴んで式を擧げる。

會葬者は香料又は玉串料を供へる。

葬式の順序は

一、棺の前で寺僧の讀經、又は神官の祓詞がある。
二、記錄係の香料受が擧式の役配を讀む。
三、出棺し式場に行く。
四、式場では寺僧の讀經、親族が燒香する。
五、喪家の者二三名葬者に謝意を表す、これを禮場といふ。
六、一同退散す。

雨天の時は、式を喪家ですることがある、これを内燒香といふ。
葬儀が濟むと近所の人は其夜一切の後始末をして靈前に看經して退散す。
それから七日ごとに「かんき」といつて看經す。

方言

君(おでえ、われ、わえ)。書いた(かーた)。高い(たかー)。長い(ながー)。入る(はーる)。早い(はやー)。無い(なー)。下さい(下んせー)。うそ(おつぱ(。出した(だーた)。さした(さーた)。泣かした(泣かーた)。惡い(おへん)。歸つてもよろしいか(いんでもえーか)。ほんのすこし(ちーとばー)。行くといふて(行くちゆーて)。ようよう(よーよろ)。母(かゝん)。父(とゝん)。たくさん(えつと)。

年中行事　(新暦舊暦を混合してある)

一月元日　四方拜、朝暗い中から起きて若水をくみ神樣にお燈明し、鏡餅、御酒、雜煮を供へ一家族睦まじく屠蘇を酌み雜煮餅を食ふ、門松を立て注連を引き神棚には山草や橙、串柿、若松、大根、ほんだわら、鰯、昆布を飾りつける。
國旗を家毎に揭げ野も山も新年を迎へる樣で新しい心持になる
それから氏神へ參る、官廳學校では拜賀式を行ふ。

一月二日　早朝から起きて神樣を祀り屠蘇を酌み雜煮を食ふ、この日は仕事始めで家業を少し試みる、兒童は書き初めをする。

一月三日　元始祭、神を祀り雑煮を食ふことは二日に同じ。

一月七日　七日正月といふ、七草雑煮を神に供へ一家のもの之を祝つて食ふ。

一月十一日　農家ではこの日を祝ふ、早朝「ヤレボー〳〵」と大きな聲で呼ぶ、ヤレボーとは八重穂といふ意味で豊年を祝ふのである、一切の農具を庭前へ揃へて甘酒や餅を供へる。この日を御田植といふ。

一月十四日　「飾廢し」といつて神に飾つた注連一切をとりはづし之を集めて焚く、「トンド」といふ、このトンドで鏡餅を燒いて食ふ。

一月十五日　粥を神前に供へて一家粥を食ふ、箸は茅の莖でこしらへる、翌日その箸を庭前に立てる。

一月十六日　佛正月といひ餅をゆで、黄粉を塗り佛に供へる、この日を籔入といつて雇人など一日の暇をもらつて歸省したり或は遊んだりする。

不動尊の會陽　會陽は大正十五年舊正月十六日夜行つたのを始めとする、それから毎年一回この日には夕方から僧數名を招き讀經し説教供養の後午後十時となると男女を問はず腰の物一枚で水ごりをとつて押し出す、午前一時頃神木を投げ出し一層賑ふ。

一月十七日　初觀音といつて信心者は寺に參る。觀音講をする所もある。

一月二十日　二十日正月といつて休む。

二月二日　一日正月といつて餅をついて休む。

二月十一日　紀元節

二月十五日　涅槃會といつてお寺で盛んな法會がある。

二月二十日　十九日の宵からお日待堂にお籠して旭光の出るまでお籠りし最後に禮拜して散ず、昔は正月廿日であつた。

三月三日　桃の節句で桃の枝と酒と菱餅を神に供へる。
女子が生れて初めてこの節句にあたるものは初節句といふて雛を飾つて祝ふ。

三月四日　山登りといつて花見登山するものが多い。

三月六日　地久節

三月十日　陸軍記念日

三月二十一日　春季皇靈祭

四月三日　神武天皇祭

四月八日　灌佛會、お寺では盛んな灌佛會が行はれ參つて甘茶をもらふ。

四月十日　金光教春季大祭

四月二十九日　天長節

五月五日　端午の節句とも菖蒲の節句ともいひ家々の軒には蓬と菖蒲を挿

しちまきをこしらへて祝ふ。
男子生れて初めての節句にあたるものは初菖蒲といつて鯉のぼりを立てゝ祝ふ。

五月七日　海軍記念日

六月一日　六月一日(ロクガツヒトヒ)といつてしんこ餅をして休む。

六月六日　祇園樣のお祭で休む。

六月十七日　嚴島神社のお祭り。

六月廿四日　天台宗祖師講といつて傳敎大師を祀る。

七月一日　死んでから三年以内の家では燈籠をつるして供養する。

七月七日　七夕祭、又乞巧奠といつて子供は五色の短冊を竹の枝に結びつけて庭前に立て西瓜茄子などを供へ牽牛織女の二星を祭る。この邊では六日の夜行はれてゐる。

七　月十日　觀音の緣日である、お寺又は觀音堂は賑やかである。檀那寺の僧は各家を巡つてお經を讀む、これを棚經といふ。

七　月十三日　盂蘭盆、床に佛檀をこしらへて祖先をまつる、夜は松明をともす、正月からこの日までの半年分の掛取をすます大決算日である。

七　月十四日　盂蘭盆の二日目、精靈棚に燒香供養しお墓參りをする。

七　月十五日　盂蘭盆の三日目、中元といつてお寺では施餓鬼供養をする。

七　月十六日　がきのくび又は閻魔詣といつて休む。

八　月一日　又藪入といつて雇人の歸省墓參りが自由に許される。農家では八朔といつて休む。江戸時代は德川家康の江戸入城を記念日として正月元旦についての祝日であつた。

八　月十五日　名月

九　月九日　重陽又は菊の節句である。

九　月十三日　名月日といふ。

九月二十三日　秋季皇靈祭

十　月三日　大浦神社安倉八幡宮のお祭

十　月十日　金光教秋季大祭

十　月十三日　戊申詔書下賜記念日

十　月十七日　神嘗祭

十　月三十日　教育勅語下賜記念日

十一月三日　明治節

十一月八日　鞴祭で鍛冶屋など金物を取扱ふ者が休む。

十一月廿三日　新嘗祭

十二月一日　おと朔日（オトツイタチ）

十二月八日　八日まち、毘沙門天をまつり蒟蒻を食ふて祝ふ。

十二月廿二日　黒住教では冬至祭といつて教祖を祀る。

十二月卅一日　大晦日又年越といつて麥飯鰯などを食ふ、お正月の神飾りや歳暮の祝儀をすます。

盆からこの日まで半年分の決算勘定をする。夜は年越の惡魔拂といつて豆を煎つて「鬼は外福は内」と云ひながら撒く、追儺といふ。

人物

小野幸七

通稱甚十郎左衛門、尾燒の人、永祿時代の生れで、武枝に長じ豐臣太閤の馬役を奉仕す。後暇を戴き鄕里に歸る。太閤の御下げ品、感狀武器等を末裔所有してゐたが、火災のために失ふ。唯純金一寸八分の觀音像は、當時尾燒池畦にある堂に、遷し祀つてゐたために現在に殘つてゐる。後人この觀音樣を信仰するものが多い。

岩井昭見

東安倉の人で天保十年二月二十八日生である。醫を業としてゐた。昭見は大阪の緒方弘庵につき醫術を學び後ち紀州の大醫花岡について修業した。鄕土で開業してゐた傍ら書道漢學に通じていたから寺小屋を開いて子弟を教養した。又大の旅行好で九州、四國、東海道の大ていの所は踏破したといふことである。

福島玄仙

文政の生れの人で、祖先代々米子藩の御典醫であつた。祖父玄秀は寛政年間金光町大谷山善勝寺寂光院の住持が知人の故に、遊びに來り瀨戸内海の風光明眉な事を大變喜んで、度々この地に遊んだ。嗣子玄仲に至つて現寄島町西安倉に居住して民衆に施藥した。その子玄仙の代になつて、中安倉に移り更に現在の所にかはつた。玄

仙は幼い時から、才智にすぐれてゐた。當時蘭法醫の進んでいるのを聞いて、その研究に志を立てた。そして遠く九州のはてなる長崎に遊學し、蘭醫についてその醫術を研究し、數年の後蘭法醫術を鄉土に紹介した、近鄉からその施藥に預らふとして來る者が大變多かつた。現寄島東尋常小學校醫福島春太郎はこの人の孫である。

玄秀—玄仲—┬市郎
　　└玄仙—保太郎—春太郎

福島市郎源孔彰

玄仙の兄である。生れつき武藝を好み、少し大きくなつて、池田藩士瀧岐樂右衛門に師事して、神道無念流劍術の蘊奥を究めた。弘化、嘉永の間に武術修業に出て各國名ある武藝者を訪ねて、その技を磨いた。その修業日記は、若い人をして掌中に汗を握らすの記事が多い、泉州堺住吉明神境内には、この人の大きな額が、奉納してある。歸鄉中は多くの門人のために武技を授けた。

大店

國頭に大富源者の大店といふのがあつた。田畑七十餘町歩と大金を持つてゐた。三郎の畑の大部分と鳴瀧方面の過半數を持つてゐて、不動瀧見物も他人の地を踏まぬといはれてゐた。近鄉のものは琵琶湖の水は減つても、大店の身代は減らぬとさへいはれてゐた。度々領主に軍用金を、奉つてから數代大庄屋格となり、代々十六人扶持を貰つて、苗字帶刀を許されてゐた。

三宅多治吉—源七—多源次—太源次

西屋

早崎に酒造家西屋といふ内があつた。主人齋藤恒右衛門は、中大島の人で嘉永元年に移つたものである。酒を造り領主に金を奉り、苗字帶刀を許されてゐた。宅の構が大きく美しかつたので、領主が度々來られたと云ふことである。嘗て足守藩の許を得て、西屋札と云ふ紙幣を發行したことがあるが、貨幣制度が改つて廢れた。邸

宅は今もそのまゝ殘つてゐる。

名主源介

宮通の人で姓は田中と云ひ、生れつき心正しく飾り氣なく、仕事に精出した。西山拙齋について敎を受け、父に代つて名主となりよく村民を愛した、この家は代々名主を勤めてゐた、父善七は、組頭となつてゐたことが四十八年間で、官から褒められた。祖先宗左衛門は、細川通董について伊豫川之江から移つた者だと云ふ。

名主直四郎

安倉の人で姓を鈴木、名を直四郎、字を士德と云ふ。生れつき勤勉家で、西山拙齋に漢學を習ひ名主となつて、久しく村民を愛し治めた。祖先治郎藏は六條院西村から慶長五年に、この地へ移つたのである。

士德の歌二首

子規　月宿る雲のあなたに杜鵑一聲聞けと音をもらしたる

螢　夕されは空に亂れて飛ふ螢燃えつ消えつゝ物思ふらし

原田新造

中大島の人でその父多吉郎が、この地の名主を勤めてゐた。新造は父の後をついで、前後二回に亘つて數年村治につくした。築港、新開、地租改正等の事業については功勞があつた。

齋藤瀧左衛門

池田岡山藩主章政に仕へ、臺所奉行であつた。文學殊に和歌の道に秀でてゐた。藩公參勤交替には、常に御供をしてゐた。美濃大垣の藩主に、參勤交替の時に大いに面目を擧げたことがあつて、藩主膚着の定紋付を拜領したこともあつた。同家に武器、藩公の書が多く殘つてゐる、廢藩と同時に東安倉一二七七番地に歸り子弟の敎養に努めた。士族齋藤定次郎の內がそれである。

小川屯

家は代々大浦神社の神官である。屯は幼い時から學問を好み、笠岡の小寺帶刀について、深く勉强して歸り自分の宅で教へた。集り來て學ぶ者が大へん多かつた。明治の始め啓蒙舍の先生となり、ついで、日新小學校の創めて建てられると、その校長となつて教育の事につくされた。明治十三年病死された。

陶山三郎

中大島の人である。片本濵へ移つて來て、道場を開いて神道無疆流の劍道を教へた。明治十九年七月明治天皇が岡山へ行幸遊ばされた時、岡山縣内の豪い劍客八人を後樂園に招いて、擊劍の技を天覽に供したことがある。その時三郎も選ばれて行つた。弟子は近隣數國に亘り五百餘人もあつた。又この地の議員となり、村政に力をつくし世の爲めに、お金を寄附したことも度々あつて、銀盃、木盃等たくさん戴いた。

貞婦さと

大島村松尾の人で中安倉鈴木光藏に嫁した、生れつき溫順で同情に富み、夫を助けて家業に勵み殊に舅八百造へは誠を盡して事へ顏色を和らげ言葉やさしく身を碎いて孝養つくした。從つて家内は睦まじく人の見る目も羨まれた。こんな心掛の人であつたから近所隣の人への交りも親切で人情に厚かつた爲め近隣の褒め者であつた。この事が時の鴨方藩主に聞え明治三年十二月褒美を戴いた。それから數年の後鈴木常次郎等四人の子供を殘して三十九才で死んだ。

（上書きに錢札五貫文と記載して）

六條院西村字安倉
八百造忰光藏妻
さと

性質貞實に而舅八百造江之事へ方宜敷家内睦敷近隣の交り厚く萬事心得方宜敷趣相聞依て御褒美として鳥目五貫文被下候

庚午十二月朔日

鴨方藩廳

齋藤樂二

齋藤恒右衛門の孫で、生れつき謹直で吏務に長じてゐた。明治十七年戸長となり、數十年間本町の爲めにつくされ町民から親の樣に慕はれた。教育の事業にも力を注がれて、賞與されたこともあり、世の人のために金品を寄附して、銀盃木盃を戴いたことも多く、明治三十七八年日露戰役の功勞によつて勳七等を授けられた。大正二年病死の時は、盛な町葬を行はれた。

道廣忠讓

東安倉の人、意志が强く思ふことは潔くやり遂げる人であつた。村會議員となり、助役となり。明治三十三年には村長に選ばれた。何事でも快刀乱麻を斷つやうな勢で、町政の改善をはかり、避病院を建て西校の改築を企てた。町長を退いて。後議員となつて町政につくした。大正三年病死した。氏の邸宅は今の海樂寺覺禪坊である。

岡本仲吉

中安倉の人で、武術に長じてゐた。不遷流柔道四世允可神戸市在住、田邊又右衛門に師事するに及んで、その怪技は斯道同好の人士間に鳴り響いた。郷土にあつては漁業の傍ら、武道の鼓吹に努めてゐたが、明治四十三年朝鮮近海に出漁中、暴風にあつて難船死去す。

村上森造

氏は明治三年早崎の豆腐屋に呱々の聲をあげた。家庭が餘り豐でなかつたので、家事の手傳のために、豆腐を行商した。十四五才の頃から役場の小使もし、魚の行商もし、卵買ひもし、佛會、盆には四國の伊豫寒川から、しきみを買入れる等種々の仕事に從事してゐたが、常に大志を放さなかつた、丁度その頃、神戸から麥稈を買ひに來るものがあつて、麥稈が帽子の原料になることを聞き、決心して、大々的に商賣を始めやうとして身を抵當に入れ、眞田を買ひ込み明治二十二年神戸へ出た。

そして麥稈商を始めたが、仲買人の手を經るため多くの口錢を取られるので、直接外國との貿易によらねばならぬと思ひ、早速ドイツ、ドレスデン市の某商店と店員の交換を行つた。その結果両方間に諒解と信用とを得て、大々的に取引が出來るやうになつた、本年五十九才で千万長者になつた人である。

氏は又先見の明があつて一度として損をした事がない、大正九年頃多くの商人が欠損を生じた時でも少しも損をしなかつた。奮鬪の二字によつて今日の地位を築いた氏は大へんな運動家で毎日ラケツトを手にせぬ日はない。又同情の人で神戸市の學校等へ御眞影奉安所や救助費を出し、故郷寄島町及び附近町村の學校、役場、青年團其他道路、社寺、火見櫓等公共事業に、すでに拾數万圓を寄附してゐる。最近寄島町のために三郎島に通ずる二十二間幅道路を作り三郎島に築港の計畫中で經費八拾六万圓であるといふ。町民は氏の親切に酬ひるために、最近寄島町に氏の銅像を建設することになり、朝倉文夫の指導で門下の長谷川某が、苦心の結果、目下神戸

市元町播新が引受けて、製作中である。

幼時より鍛錬された氏の躰軀老いて益々盛である。年六十に達してゐるが友を促しては六甲山を突破し郷里に歸つては自動車にも乘らず安倉峠を徒歩で平然としてゐる、この強健な軀こそ健全な精神の宿り場所である。不撓不屈鉄石の如き堅き心も軀と共に鍛へられたのである、意氣衝天死して後止むの人である。氏の娯樂の一としては公共への寄附である、よく蓄へて有益に使ふこれ氏の人と爲りを知るに難くない。

村上常太郎

氏は生れつき謙遜家で表面無頓着の樣であるが、内面は膽玉が据つてゐて、而も物の理解が早く何事にも細心の注意を拂つてゐる。殊に記憶力の確かな事は珍らしい程である。

氏は千万長者村上森造の弟で幼い時は兄と共に豆腐を賣り歩き、麥稈眞田の製造や

買入業に從事した。

兄の上神後は眞田買入の支配人となつて敏腕をあらはした。三十才頃神戸に出て兄の村上商會に入り眞田部の常務取締として年毎に成績を擧げた。

今年五十六才で百万長者となつた、これは皆奮闘の賜物である。氏は又同情の人で色々の方面へ寄與した金額は壹万圓を越してゐるが其の中で最も人を感動せしめたのは難儀人の救助である。此の貧民の救護や病人の慰問に盡さるゝ精神こそ氏の人格の發露であらう。

町會議員（昭和三年七月一日現在）

川崎淺次郎　平方與一郎　平方治太郎　岡邊儀忠太
岡本儀八　鈴木豊吉　三宅新介　道廣與三郎
三宅文七　三宅仁平　佐藤柏太郎　板政虎
高藤都一　高田嘉平治　笠原胸太　大島喬

竹本覺一　荒川雅一
學務委員
川崎淺次郎　鈴木豊吉　三宅新介　三宅仁平
板政虎　大島喬　安藤直一　秋田貞治

金鵄勳章拜受者

明治三十七八年戰役

竹正善太郎　功七級　（故人）
大室佐市　仝
山本伊助　仝
藤井松三郎　仝
荒川三保太　仝

應本佐一　功七級
原田彌晉太　仝

日獨戰爭

山本平助　功七級

戰病死者略傳

明治二十七八年戰役之部

故陸軍歩兵一等卒　笠原庄一

君寄島町福井の人で明治六年二月に生れ、天資英邁で果斷、常に信義を以つて人に接してゐた。

同二十六年十二月第五師團歩兵第二十一聯隊第十二中隊に入營す。翌年日清の國交破裂するや同年六月大命を奉じて從軍し、各地の戰鬪に參加し、遂に同年九月平壤

總攻擊に當り奮戰中敵彈のために胸部を貫通せられ、遂に國難に殉ず。悼ましいことである。官其の功を賞し參百五拾圓を賜はつた。

故陸軍歩兵上等兵　鈴木惠三郎

君は寄島町中安倉の人明治六年十一月に生れ、同二十七年日清の戰端が開かれると君は其の時偶々第五師團歩兵第二十一聯隊第四中隊に服務中であつたので、動員下命と共に奮然として出兵し、爾來數度の戰鬪に參加して武功赫々たるものがある。同年九月船橋里で奮戰中敵彈に中つて戰死した。官其の功を賞し金參百五拾圓を賜はる。君死すと雖も芳名千古靑史と共に朽ちず輝いてゐる。

明治三十三年北淸事變之部

故陸軍歩兵上等兵　山本虎一

君は寄島町早崎の人明治十一年十二月に生れ、同三十一年十二月第五師團歩兵第四十一聯隊第四中隊に入營す。同三十三年北淸事變起るに及んで同年六月蹶然として出兵し、各地に轉戰した、不幸にして中途病にかゝり淸國太沽假病院に收容せられ遂

に異域の露と化した。官其の功を録し金參百貳拾四圓を賜はつた。

故陸軍歩兵一等卒　頃末與一

君は寄島町宮通の人明治十二年四月に生れ、同三十二年十二月第五師團歩兵第四十一聯隊第七中隊に入營す。同三十三年北清事變が起るゝ彼地に渡航し、各處の戰鬪に參加して、而も身に創傷を受けず。戰功も亦大であつた。不幸一朝守備隊附を命ぜられて病を得療養効なく遂に逝く。寔に惜むべきことである。功に依り金參百貳拾四圓を賜はる。

故陸軍輜重輸卒　坂本定吉

君は寄島町尾燒の人明治二年八月に生る。性質溫良で能く家事を勵む。同三十三年北清事變起り召されて、第五師團衞生豫備廠に屬して征途に上り、各地に轉戰して能く其の本分を全ふす。不幸中遂に病魔に冐され、同三十四年二月六日天津兵站病院に於て遂に易簀す、功により金參百貳拾四圓を賜はる。

明治三十七八年戰役之部

故陸軍歩兵伍長勳七等功六級　原田幸太郎

君は寄島町鏡の人明治六年五月に生る。資性英敏而かも純朴で恭謙であつた。同三十七年日露両國干戈相動くや。君亦徵されて後備軍に編入せられ、歩兵第十一聯隊に屬して征途に出た。爾後各地に奮戰中、同三十八年三月一日清國盛京省王家窩棚に於て名譽の戰死をした。戰功により勳七等青色桐葉章及び功六級金鵄勳章竝に年金貳百圓を賜はる。

故陸軍砲兵軍曹勳七等　大島平左衛門

君は寄島町の人明治九年六月に生る。性鋭敏で快活、事を行ふや果斷で勇氣あり。同三十七年二月日露戰役起るや召されて、野戰砲兵第五聯隊補充兵大隊に屬し各地に轉戰す。不幸中途で二豎の爲に冐され、同三十八年三月二十三日病院船東英丸に乘じ歸國の途中船中で病死す。戰鬪により勳七等に叙し青色桐葉章を賜はる。

故陸軍歩兵軍曹（勳七等 功六級）　大島良一

君は寄島町片本の人明治十年二月に生る。天資剛壯而かも粗暴の行なく人皆其の沈着莊重の態度をほめる。同三十七年二月日露の戰起るや、第五師團歩兵第四十一聯隊に屬し征途に出る。到る所で奮戰し其の勳功が多かつた。不幸にして負傷し、同三十八年九月三十日清國香家爐定立病院で不歸の客となつた。戰功により勳七等に叙し。青色桐葉章及功七級金鵄勳章竝に年金壹百圓を賜る

故陸軍砲兵上等兵（勳八等 功七級）　岡城與吉

君は寄島町東安倉の人明治十四年一月に生る。同三十三年十二月藝豫要塞砲兵大隊第二中隊に入營す。同三十七年日露戰役開くや、同年七月動員下命、徒歩砲兵第四聯隊第二中隊に加はり出征す。爾來遼陽、奉天附近、沙河、三家子附近の戰鬪に參加し同三十八年三月十日奉天府毛家屯の會戰に於て戰死す。功により勳八等白色桐葉章及功七級金鵄勳章竝に年金壹百圓を賜はる。

故陸軍歩兵一等卒（勳八等 功七級）　岡城源一郎

君は寄島町東安倉の人明治十五年七月に生る。資性溫順で謙讓の德に富む。同三十七年二月日露の戰起るや、從軍して各地で戰鬪中敵彈のために負傷し、同三十八年九月五日清國盛京省南八里店第五師團第三野戰病院で死去した。功に依り勳八等白色桐葉章及功七級金鵄勳章竝に年金壹百圓を賜はる。

故陸軍輜重輸卒勳八等　大島芳助

君は寄島町片本の人明治十四年十一月に生る。同三十五年六月輜重兵第五大隊第二中隊入營す。同三十七年日露の戰ひ起るや充員召集に應じ、第五師團兵站彈藥縱列に屬し征途に上る。爾來各地の戰に參加し能く其の任務に服す。中途病を得て、同三十八年九月四日清國鐵嶺兵站病院で死去した。功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はる。

故陸軍輜重輸卒勳八等　川崎常太

君は寄島町東安倉の人明治十七年八月に生る。同三十八年二月野戰重砲隊の補充に加はり戰地に赴き、各地の戰鬪に從軍中、同年七月病にかゝり郭家岺舍營地で病死す。功に依り勳八等白色桐葉章を賜はる。

故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　田中雅一

君は寄島町中安倉の人明治十六年八月に生る。同三十七年日露の戰ひ起るや召されて各地の戰鬪に參加し、卒先奮鬪常に他兵の模範であつた。同年十月萬寶山攻擊に際し激戰中、生死不明となつていたが、後死体を發見し名譽の戰死者と認められた。戰功に依り勳八等白色桐葉章及功七級金鵄勳章並に年金壹百圓を賜はる。

故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　村上與太郎

君は寄島町國頭西の人で明治十五年十二月に生る。同三十七年二月日露兩國戰を始めるや、君は第五師團の現役兵であつた、動員下命と共に歩兵第四十一聯隊に屬して出征した。爾後各地で轉戰する毎に殊功を建てた。同三十八年八月三十日清國盛

京省遼陽州龍房嶺北方高地の戰鬪で遂に陣歿した。功により勳八等白色桐葉章及功七級金鵄勳章並に年金壹百圓を賜はる。

故陸軍砲兵上等兵勳八等功七級　黑川萬次郎

君は寄島町中安倉の人で明治十五年八月に生る。天資快濶で剛壯。同三十七年二月日露戰役始まるや、野戰砲兵第五聯隊に從軍し、到る所奮戰中不幸にして傷を負ひ、同三十八年二月六日清國盛京省小甸子第五師團第三野戰病院で永眠した。功に依り勳八等白色桐葉章及び功七級金鵄勳章並に年金壹百圓を賜はる。

故陸軍歩兵伍長勳七等功七級　道廣瀧五郎

君は寄島町西安倉の人で性快活事を處すること果斷である。明治三十一年十二月第五師團歩兵第四十一聯隊に入營し、同三十三年北清事變起るや、聯合軍に參加して各地に轉戰し功に依り勳八等に叙せられ、一時金百八拾圓を賜はる。同三十七年日露戰爭起るや、充員召集の命に應じて出征す、爾來蓋平金州南山遼陽等の戰ひに從つ

て功あり、伍長に昇進す、君倍々勇奮し萬寶山の激戰で奮闘中不幸敵彈のため遂に戰死す。三十七年十月十六日である。功により勳七等青色桐葉章及功七級金鵄勳章竝に年金壹百圓を賜はる。

故陸軍歩兵一等卒勳八等　三宅留太郎

君は寄島町中安倉の人で明治七年五月に生る。同三十七年二月日露戰役起るや、召に應じて後備歩兵第十一聯隊に屬し出征し轉戰中、不幸二竪の爲に同年十二月十七日遂に清國南瓦房店兵站病院で病死した。功に依り勳八等白色桐葉章を賜はる。

故陸軍砲兵上等兵勳八等　中濵佐七

君は寄島町國頭中の人で明治二十年九月に生る。性來頗る勇敢の氣に富んでゐる。同四十年十二月臺灣山砲隊に入營、爾後孜々として軍務に勉め成績大いに揚る。同四十年土匪討隊伐隊に從軍中不幸にして二竪に犯され遂に死去す。功に依り勳八等寶瑞章及金百參拾圓を賜はる。

結び

鄉土は吾等の祖先の靈の鎭まつてゐる所である。吾等が大きくなつた所である。父母兄弟朋友の在す所である。されば一番住みよい鄉土であらう。誰しも鄉土の發展を希はないものはなからう。吾々鄉土にある者は互に長をとり短を捨てゝ共存共榮の實をなし將來祖先の名を擧げこの鄉土の花を咲かせて第二の國民の務を全ふせねばならぬ。

鄉土讀本編纂委員　秋田貞治
仝　中西末松
仝　花房逸夫
仝　江原祀男
仝　荒川昻

昭和三年七月

（終）

仝　仝　仝　仝　仝　仝

今井清　百六
池田績
黑川嫁
西川かねよ
淺野高代
松葉サトノ

昭和三年九月五日印刷
昭和三年九月十日發行
（非賣品）

發行所　岡山縣淺口郡　寄島東尋常小學校
編輯兼發行者　岡山縣淺口郡鴨方町大字益坂三百八番地　秋田貞治
印刷者　岡山縣淺口郡金光町大字大谷三百三十番ノ内第一地　西東一
印刷所　岡山縣淺口郡金光町大字大谷三百三十番ノ内第一地　大谷活版所

文庫
28
167
広島大学図書
2000066167